
我思う、故に我在り

胡竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我思う、故に我在り

【Nコード】

N4213E

【作者名】

胡竹

【あらすじ】

現代から江戸時代は末期、激動の幕末の世へと時を越えてしまった少女。その待ち受ける運命とは。 (本作品は、歴史上の人物を扱った創作歴史小説です。人物の描き方、あるいは文章や内容に嫌悪感を持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、ご興味を持たれた方のみご覧くださいませ。)

序章

時は、平成。

二〇〇×年四月一日

ここ何週間か暖かい日が続き、この日もつららかな陽気で、ホッと
とする春の香りがあたりを包んでいた。

休み明けから高等部へ上がる玲は、
学園の理事長へのあいさつと、新入生代表の宣誓や生徒会長との対
面式の打ち合わせのために学校へと来ていた。

しかし、思っていたよりも早く済んでしまった打ち合わせ。

そのため玲お抱えの専属運転手がまだ迎えに来ていなかった。
門前に立ちボーっとした様子で、佇んでいる玲。

道行く者たちがそんな彼女に視線を寄せているが本人はまったく
気付いていない様子で、優しい自然光を降り注ぐ空を眺めて何か考
えに耽っている様子であった。

(いい天気……たまには、自分で帰ってみようかな?)

ふと、そんな考えが脳裏に浮かぶ。

そして、一つ頷くと玲は歩き出した。

緑の木立が映える洗練された閑静な街を、顔を綻ばせながら歩む。
普段一人で出歩く機会の少ない彼女にしてみれば、これは小さな
小さな冒険。

早速可愛らしい雑貨屋を見つけると、吸寄せられる様にお店の中
へと入って行った。

その後も次々とブティック、書店、花屋といったお店に手当たり

次第立ち寄り、気が付くと元々持っていた私物や購入した品々の紙袋で両手は塞がり結構な荷物となってしまっていた。

「ちょっと調子に乗って色々買い過ぎちゃったな。流石に重いわね……時間も結構経ってるみたいだし、そろそろ帰ろうかな」
空が黄昏れかかっている事に気付き、ようやく帰路に着く事にする。

しばらく歩くと、小高い丘が見えてきた。

茂る草木に隠れるように、古びた木製の立て札が建っている。

「??? お寺? こんな所に寺社が在ったなんていままで気が付かなかった……」

そこには、大して広くもない幅の階段、周りには階段を守るかのように立ち並ぶ青々とした葉をつけた巨大な樹木、階段の先には鳥居が微かに見えている。

鳥居の向こう側から、淡い桃色の花弁が風の間を縫うように舞い降りてくる。

その花弁と木々に囲まれた階段の天井から垣間見える夕焼け色に染まりつつある西の空と、まだ少し残る染まりきらない青い空、うつすらと覗く白い月面。

「うわぁ……」
自然が織り成す彩色の競演に思わず見惚れる。

その光景に導かれるように玲の足が頂上へと目指して自然と階段を上っていく。

すると、そこには満開の八重桜。

「す……す……い………」

樹齡何年くらいなのだろうか、それは立派な桜の木が立っていた。咲き誇る華やかな八重桜が微笑む。大地や空気までも薄く桜色に染め春の訪れを知らせてくれている。

玲は花の精気に魅了されたかのように視線が釘付けになる。その桜色に触れようと無意識に玲の腕が伸びた。すると、

「っ！！」

突然襲ってきた耳鳴りと眩暈。

それと同時に強い風が玲を襲う。

玲は頭を押さえ、倒れそうになるのを堪えて立ちすくむ。

そんな玲の意思など知ってか知らずか悪戯に風は更に強くなる。

舞い落ち積もった花弁をも巻き上げ、踊り狂うように花弁が舞う。

鮮やかな桜色が泳ぐ。

玲を何処かへ誘うかのよう^{しなほ}に激しく。

酷い眩暈に耐えながら玲は天を仰いだ。すると其処は、凄まじい風の渦の中だった。玲を中心に流動する風はひっきりなしに吹き、玲を閉じ込める。

「な につ……!?!」

しかし事態を飲み込む前に、あまりに強い眩暈に視界が歪み意識が遠のいていく。

玲は、ぐらりと世界が反転していくように力なく地面に崩れ落ちる。

夢か現か幻か、薄れいく意識の中で、舞踊る花卉の向こう側に着物姿の女を見た。

女は桜の木を見上げていた。

「た…す…け…」

玲が、最後の力を振り絞り小さくかすれた声で助けを請う。

しかし女は、気付かない。

女の後方から男が歩いてくる。

その男もまた着物を着用し、更には腰に刀を差していた。その姿は、さながら侍の格好である。

男は女の姿を見つけると、愛しげに目を細め何とも温かな慈愛に満ちた表情で、女を呼んだ。

自分と同じ名を紡ぐ、初めて聞く声なのに初めてではない様な、
酷く懐かしく優しい音色の声。
なぜだか、泣きたくなるほどに切ない。

男に呼ばわれた女が振り返った。
その容姿は。

(……………わ……………た……………し!?!……………)

着用している衣服は違えど、その容姿は玲と瓜二つ。否、瓜二つ
などでは無く、それは紛れも無く玲である。
前世の玲なのか、それともただの夢か幻か。

現と意識が闇に沈む境界の狭間で、不思議な感覚に揺蕩たゆたいながら、

玲は意識を手放した

。

序章（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

作中にて、玲が寺社を発見する。という場面がありました……その件について一つ。

え〜と、作中で玲が発見した際「??お寺?」と言っております。ですので皆さんもお寺であると思ったかと存じます。

ですが、作中に鳥居も出てきます。

今では一般に、『お寺には鳥居は無い』が常識になっていますね。混乱した方も居るかと思いますが、わざとこのような設定にしてあります。

誤解した方、混乱した方、申し訳ありません。ご了承ください。

（私の脳内設定ですのでそれほど気にしなくても良いのですが）、ちよつと、ご説明を……。

明治初期に「神仏分離」「神仏判然の令」が布告されるまでは、神仏は入り混じりあい習合していました。

また、全国各地で廃仏毀釈運動が起こった際に生き残りのために、鳥居をお寺に作った寺院などもありました。

鳥居があるのは神社、というイメージが強いですが、神仏習合時代の名残や生き残りのために建てた等で鳥居のあるお寺は今も存在しています。

今では、珍しく奇妙にも思われるかもしれませんが、そんな場所（お寺）が、今回玲がタイムスリップした舞台となっています。

過去へと導く場所として、神秘的であり、幻想的であり、また歴史的な意味でも相応しいと思い選びました。

それでは、拙い文章ですが、楽しんで頂けたら幸いです。 胡竹

時越え 壱

朝の勤めである読経を終え、凜とした空気の中、義観ぎかんは壮大な土地の境内を歩いていった。

誰かが根本中堂（本堂）傍の桜の木の根元に寄りかかるように座っている。

まゆを顰める義観。

近づくにつれて、その根元にいる人物に意識がない事を見止める。

（おなごか？ 珍しい衣を着ておるが異人ではなからうな？）

義観は膝をつき、覗き込むように人物を確認した。

（……異人ではないようだ、しかし……）

異人でない事を確認した義観。だが、その人物を目の辺りにし義観は思わず息を呑んだ。

年の頃は十代半ば位だろうか。

手足は長く、透き通るように白い。

豊かな漆黒の艶やかな髪は、きめ細かい肌の薄桃色の頬を縁取って緩やかに海面の波が揺れるかのように腰に流れている。柳の葉のようにしなやかな線を描く肩、伏せられた瞼の長い睫毛、桜色の清楚な口元、スツと整った鼻筋、細面の華奢な頤。

木にもたれ意識を失う娘は、月の如く美しく、花の如く清艶せいえんとしていた。

整った容姿に、説話せつわの天女が天上から舞い降りたのか？と思わず取り留めのない事を考えてしまう。

しかし説話に聞く羽衣はころもとは程遠い、見たことの無い娘の格好を今一度眺めると、よもや、このようなおかしな衣に身を包む天女もあらんだらうがの。などと現実に戻る。

そこに倒れている人物。

義観が言うに、おかしな衣に身を包む娘　それは、学校の制服を着た玲であった。

ふと、義観が何気なく視線を落とすと、『あるもの』が目に残まる。

「ん？　これは……!？」

それは玲の長い髪に絡み付く、一輪の桜の花。

義観は花をそつと手に取り、自分の目を疑うようにまじろがずにその花を確認する。

「……桜、だな……この季節に桜？　狂い咲きかろう？　……この娘は何処から来たのだ？」

義観は不思議に思いながらも、季節外れの桜に出逢えて得したといった風に桜の花を優しく懐紙に包む。

そして「さて、どうしたものか」と包んだ懐紙を懐にしまいながら玲を見る。

「顔色は少し悪いようだが、怪我はしとらんようだな。少し休めば大丈夫であろう」

しかし、このまま放っておく訳にもいくまいな。と義観が独り思案していると、背後から声を掛けられる。

「和尚カシヨウどうされました？」

後ろを振り向くと、竹箒を手にした弟子の明心みよこころがまゆを顰め焦燥感をつのらせた顔をして駆け寄ってきた。

「ああ、大事ない」

「この方はどうされたんですか？」

いまだ、まゆを顰めたままの明心は倒れている人物に視線をよせながら言い募る。

「ここに倒れておったんだ。この姿を見るにどうやら、訳ありのよ
うだな。」

掃除は、もうよい。明心、この娘を離れに運べ」

「はっはい……」

事態の把握をしていない明心は戸惑いながらも、義観に言われる
がままに返事を返す。

「私は勤めがまだ残っている。ひと段落したら、私も向かう」

そう言つと、義観は意識のない玲を明心に託し早々と本堂へと歩
いて行つた。

瞼越しの明るい光に頭が覚醒してくる。

玲は、その光に誘われるようにとるとると瞼を開いた。

長い睫毛に縁取られた黒目がちの大きな瞳に写ったものは、見慣
れない木目の広い天井、自身の部屋でないことは分かる。

（ここはどこ？ 私……そうだわ、学園の近くにみつけた寺社の桜
を見てて、眩暈がして気を失つたんだ）

途端に玲は、自分の状況を把握しようと寝床から体を起こし辺り
を見回した。

自分が横になっていた右側には障子があり、そこから光が全面に障子紙を透して降り注いでいる。

障子の隙間から微かに冷たい風が室内へと流れ込んでくる。障子の向こうには外の風景が広がっているようだ。

（私、どの位寝ていたんだろう）

腕時計を見ると規則正しく動く針は、夜の七時を少し過ぎた時刻を指している。日付表示の日付は変わらない。

学園を出たのが三時半ごろ、その後寄り道をし、あの寺社に立ち寄った時には日が沈み始めていた……大体二時間位寝ていた計算だ。おかしい。ではなぜ、外が明るいのだろうか。

今は夜のはずなのに……時計が狂っているのだろうか。自分の寝ていた布団のすぐ傍にはバック等の玲の私物が置いてある。

「そうだ、携帯にも時計ついてるじゃない」

玲は、はっ、としたようにバックを手繰り寄せる。バックから携帯電話を取り出して時刻を確かめる。

しかし、携帯の時刻も夜の七時すぎを表示し日付も変わらない。

しかも、携帯は圏外を表示していた。

状況が飲み込めなくて、呆然としてしていると微かに花の香りが鼻腔をくすぐる。

導かれるように香りの方へと視線を向けると、

部屋の片隅に床の間があり、花器には尾花・萩・葛・桔梗・藤袴・撫子・女郎花と品よく趣のある立花。

玲は、中等部入学時から二年程、今は亡き祖母の言いつけで華道を習っていたため四季の花の知識には多少は精通していた。

その賜物か、自分の状況が更におかしい事に気付く。

活けられている花々がどれも秋の七草と呼ばれているものなのだ。早いものは夏前から咲き出すがそれでもおかしい。

今は春、こんな早い時期に秋の七草が揃えられようか。

ふと、先ほど目覚めたときの違和感を思い出し天井を見る。

「えっ？ ない……！？」

天井にあるはずの照明がない。

近代文明のこの時代に照明のない部屋があるのかと驚きを隠せない。

なにがどうなっているのか。自分はどうかしてしまったのだろうか？

玲の頭の片隅で本能が発する危険信号シグナルが鳴り響く。

日時と自分の状況の相違、秋の七草、照明のない部屋、繋がらない携帯、この空間が異質なものに感じられ、まるで自分の存在が間違いのような、知らない遠い別世界のように感じる。

漠然と何かが自分の身に起きていると、捉えようのない不安に駆られていると、スツと障子が開いた。

「お目覚めになられましたか？」

玲は、元々大きい目をさらに大きく、こぼれんばかりに見開く。

障子を開き入ってきたのは、玲よりやや年上つばい誠実そうな坊主頭の作務衣を着た青年だった。

その彼は柔らかく微笑みながら、

「驚かせてしまいましたね。あなたは、寺の境内に倒れてらしたんですよ。私はここの寺の修行僧、明心と申します」

この異質に感じる空間に、まるで違和感の無い作務衣姿の彼に驚いた玲だったが、

（そっか、ここはお寺なのね、だから作務衣を）

寺であるが故の、作務衣姿の青年には合点がいった。

しかし、目覚めてからずっと感じている異様な感覚までは拭えない。

お礼と此処は何処であるのか、それと違和感の残るこの状況について尋ねなくてはと、玲は寢床から抜け出し、正座をして居住まいを直す。

「助けただいたいたようで……ご迷惑をお掛けしまして申し訳あり

ません」

お世話になりました。とお辞儀をする。

「いいえ。私の師が倒れた貴方をみつけたのですよ」

「そうでしたか。……あのそれで失礼ですが、こちらは何処なのでしょう？ 私、どの位ここに……」

「ここは、東叡山寛永寺です。こちらにお連れしたのが卯の刻頃でしたから、お休みになっていたのは一刻ほどでしょうか」

（えっ、どういう事？ 寛永寺の境内に倒れてたって……どうして？）

それに東叡山寛永寺って上野じゃないの？ 私が倒れたのは、通う学園の近くにある小さな寺社よ。

どうして上野に？ それに、卯の刻って、一刻って、江戸時代とか昔の、十二刻制の時刻ってやつよね？

いまだき時間を表すのに十二刻制で言う人なんていないわよっ？！
この人、素でこんな事言ってるの？ 時代劇オタクか何か？ も
う何がなんだか訳がわかんないよ！）

自分の状況について尋ねたはいいが、ますます理解し難い状況へと陥っていく玲。

（……早く家に帰りたい。そうだ！ 携帯、圏外で使えないんだっ
た。電話、お借りしよう。）

携帯はなぜか使用不可能。今すぐ迎えの車を呼ぶためには電話が必要である。

いつもは家になんて帰りたくないと思っているのに、今日ばかりは一刻も早く家に帰りたいと心の底から思ってしまう。

玲は、内心の焦りと当惑を振る払うように笑顔を作り言葉を発した。

「あの、申し訳ないんですけど、お電話お借りできますか？」

「……オデンワ？」

明心が困惑した表情で、玲の言葉をおうむ返しした。

「……はい、電話。お電話お借りしたいんです。お願いできますか？」

「あの……すみません。オデンワとは何の事でしょう？」

明心は、本当に何の事を言っているのか分からない。といった風に、困ったような申し訳なさそうな表情を浮かべて肩をすくめる。

玲の背中に冷やりとした汗が流れた。

話せば話すほど、異様な感覚が増す。

（……そんな困ったような顔して何を言ってるの？ ……電話がわからないなんて……冗談でしょう？）

何から何まで全てが異様に感じ、不安がかきたてられ、自分が知らない世界に紛れ込んでしまったような感覚が一層濃くなる。

（や、やめてよ……そんな訳ない……でも、おかしいよ此処……。

夜の筈なのに外は明るいき、生け花は秋の七草、上野なのに携帯は圏外、この明心さんって人は、電話を知らないって言うし、昔の言葉で話すし……。

も、もしかして……わたし……タイムスリップかなんかした？

時代劇みたいな世界とか？

……ははっ！ まつまさかね。いくらなんでもそれはないよ！

……じょ冗談じゃないわ、そんなの。……そうか！ わかった！！もしかしてエイプリルフルでしょ！？）

と、都合よくこの奇妙な事態の理由をみつけて、一瞬かすめたおかしな考えを否定しようとしてみる。

おりよく今日は四月一日のエイプリルフル、これは兄たちの仕組んだスケールの大きい茶番劇だと。

（わざわざ私の知らない人にまで手伝わせて、また手の込んだ事を

したものだわ。

設定は大昔の日本にタイムスリップ？ 歴史好きの兄さん達らしいわ……でも……)

玲は、本当は分かっている。

このこじつけは自分の希望なだけであって、非現実的な絵空事である。

現実的に考えると、兄たちがこんな事をするなんて不可能なのである。

兄二人とも、もちろん父親も、エイプリルフルなんて忘れている事だろうし、自分に構っている暇などないのだ。

二人いる兄の内、上の兄は父親と仕事で海外に行っており日本にはいない、下の兄は大学を卒業し今は祖父の病院で研修医として忙しい日々を毎日過ごしている。

それに、いくらなんでもお寺を使つての悪ふざけなどと常識外れなことはしない。

明心のその人柄も、嘘や冗談を言っているようには全く見えなく、否応無しに現実を突きつけられる。

ありもしない希望は直ぐに打ち砕かれた。

玲が俯きいきなり黙り込んだためか明心は心配そうに玲をつかがう。

「大丈夫ですか？ 今、白湯と朝餉に粥をお持ちしますから、もう少し休んでいらした方が……」

「えっ！？ あ……大丈夫ですのでお構いなく。それより、あの……」

それでも理解しがたい状況を受け入れたくない玲は、一縷の望みに託すように真剣なまなざしを明心に向け、問う。

「あの……おかしな事お聞きしますが、今の年号は平成 x年の春ですよ？」

その質問に明心はわずかに怪訝そうな顔をした。

しかし、玲の表情が余りにも真剣だったためか、困惑しながらも明心は答えた。

「倒れられて、少し記憶が混乱しているのかもしれないね。」

今の年号は安政六年、季節は秋です」

決定的ともいえる駄目押し of 返事を聞いて、玲の顔から血の気が引く。

（あんせいって、安政の大地震とか安政の大獄とかあの安政！？

江戸時代じゃない！

……………私……………本当に時を越えて来てしまったの！？）

明心が、大丈夫ですか？と、心配そうに声を掛けているのも気付かないほどに、玲は気が遠くなるような混濁とした渦の中にいた。

時越え 壱（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

誤解の無き様申し添えておきますが、今回作中に登場しました、『明心』は実在する人物ではありません。

胡竹が創り上げたオリジナルの人物になります。

玲もそうですが……、設定ゼロから作り上げたオリジナル人物を、魅力的な人物に書き上げるといふ作業は難しいですね……。読んで頂く皆さんに気に入って頂ける様に書きたいのですが……そのテクが乏しいのと文才が無いのとで巧く表現する事ができていません。

お目汚しかもしれませんが、温かい目でお付き合い頂けたら幸いです。

物書き初心者で、恥ずかしいばかりの作品ですが、日々精進して参りますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

* 卯の刻……早朝六時〜七時

* 一刻……約二時間

時越え 式

「明心、どうだ？」

障子の向こう側から声をかける人物がいる。

玲は茫然自失とした状態でなんとか視線だけをそちらに向ける。

明心も呼び掛けに反応し後ろを振り返った。そして、ゆっくり立ち上がると、

「ええ、和尚。先ほど気が付かれたようです」と返事をかえしながら部屋の隅まで行き障子を開いた。

すると、そこに姿を現したのは、玲の父と同年代かそれ以下の、お袈裟を纏い茶色を基調とした法衣を着た、どこか柔らかい奥行きさと貫禄のある、割とがっしりした体格の壮年の男性。

「どうだね気分は？」

その僧は、年を重ね洪さを感じさせる面に優しい微笑みを浮かべながら、玲のいる布団の傍へと歩み寄り鎮座した。

この人が明心さんの師で、私を助けてくれた人？ と、玲は整理のつかないままの頭でなんとなしに思う。

「私は、東叡山寛永寺の坊主だ、義観という。これは、私の弟子の明心だ。おぬしの名はなんという？」

話し掛けられて、ようやくポーっとしていた頭が回転し始める。

玲は茫然としていた自分を諫め、丁寧に辞儀をしながら恐縮そうに口上をのべた。

「助けていただいたのに失礼致しました。

私は、柳崎 玲と申します。この度は、ご迷惑をお掛けしまして申し訳ありませんでした」

「いいのだよ　しかし、何があったのだ？　その衣は異人のものか？」

刹那、瞳に影が差したような悲しげな微笑みを玲は浮かべる。

（未来から時を越えてきたなんて言っても信じてもらえないよ。頭のおかしい娘と思われるにきまつてる。

でも、真実を伝えないにしても、どう誤魔化すわけ？ 私の着てるこの制服だってあやしい物として目に写ってるのよね？ 記憶喪失？ …… あっ！ 自己紹介しちゃったよ…いまさら無理ね…… やっぱり、おかしいと思われても真実を話すしかないか……）

「あの…これは私の通っている学校の制服です。 と、言っても意味がわかりませんよね？」

右手でスカート裾を少し引つ張るように摘みながら、先程と同じ悲しげな微笑みを浮かべながら二人の反応を窺う。

義観と明心は互いに顔を見合わせる。しかし、それも一瞬のことです。

義観は腕を組みながら話を促すように軽く頷き、玲を見た。

「…信じられないと思いますが、私未来から時を越えて此処に…私からしたら過去のこの時代に来てしまったようです」

言葉に出すことでどういふ訳か無性に泣きたくなる。

鼻の奥がつんとして、じわりと目頭が熱くなり慌てて指で払う。

「私にも、なぜこんな事になってしまったのか分かりません。

たまたま立ち寄った寺社にいたら、いきなり酷い眩暈と耳鳴りに襲われて、気を失って…目を覚ましたら此処にいました」

「…うむ。…確かに、おぬしの姿は初見であるが故に驚きはしたが、時を越えたとは…いささか、信じようにも信じがたい夢物語のような話だなあ…」

やはりと言うべきか、その返ってきた反応は、信じられないといった非常に困惑した様子。

しかし玲は、その反応と義観の言葉からある種、解決の糸口をみつける。

義観の言った『初見である姿』これを逆手に使えば、この姿こそ

が未来から来たという証明になるという事。

玲は、はっとしたように目を瞬き「ちょっと待ってください」と急いで、傍にあったバツクの中身を確認する。

（未来の物を見せれば、きつと分かってくれるはず。でも何を見せたらいい？ 携帯とかは刺激強そうだし止めたほうがいいかな？

無難に、生徒手帳とか？ うん、写真ついてるし良いかも）

「あのっこれ生徒手帳といって、未来での私の身分を証明するものなんです」

出し抜けにそう言って、手帳を義観に手渡す。

少し驚いたような表情で、手帳を受け取る義観。明心が、義観の斜め後ろから上半身を寄せるようにして義観の手元にある手帳を覗き込む。

一般には珍しいシステム手帳型の生徒手帳。

ワインレッドカラーの合皮素材の表紙に校章と学校名が刻印されており、表紙裏がセル付き窓になっていてそこに写真と共に名前や生年月日等が記載されている。

中身はバインダー方式で、学校の理念や学則が書かれているページに加えて、時間割、メモ帳、スケジュールやアドレスの管理機能を合わせ持ち、かなり充実した内容の使いやすい手帳だ。

「あっそのページ、じゃなかった、片面に私の名や生年月日等が記載されています」

そして、写真を指差して「これ私です」と軽く微笑んだ。

「……………」
二人は、目を見開き身体を硬直させた。

大きなリアクションはないが、初めて見る物に心底驚いているようだ。

義観も明心も手帳を見て暫らく黙ってしまっていたが、

「和尚、これはまたえらい影像ですね。この方の言う後世から来たと言うのが事実なら、後世にはずいぶん腕の長けた絵師がいる

のですね」

「ご本人そのままです。驚きましたね。と感心するように、うんうんと頷く明心。」

「おい、明心は知らんのか？ 私も此度が初見だがこれがホトガラというやつだろ？ 尾張の慶勝公が熱心にホトガラの勉強をしておると聞いたことがあるのう」

「ホトガラ？ そうなのですか？ 私はよく存じ上げませんがこれを見る限り凄いものようですね」などと、二人は手帳から目を離さず会話をしている。

「一九××年、これがお主の生まれ年になるのか？」

明心の軽い口ぶりに落ち着きを取り戻したのだから、義観は顔を上げると玲に言葉を向けた。

「はい。それで、こっちに記載されているのが私がいた時代の年です」

「うむ。 後世では皆、お主のような格好をしているのか？」

信じてくれたのだろうか？ それとも、ただ探っているだけなのだろうか？

しかし、どちらにせよ効果はあったようで、義観が矢継ぎ早に次々と質問をしてくる。

「私は、学生で学校……、今の時代で言う寺子屋、藩校、私塾のような所に勉強をしに通っていて、その学校に通う者の装いなんです」

「そうか。 その装いもだが、この手帖にしても何でできてるのか、こんな立派な面も、中の上質な紙も見たことも触ったこともない」

義観は、半ば関心したように言う。

「これは何でしょうか？」

明心が興味深げにある物を見ている。

何を指しているのかと玲も手帳に視線を向ける。するとそれは、ペンホルダーに収まったボールペンだった。

玲は困ったように眉を下げ曖昧に微笑む。

「え〜と……それは筆記用具です。これで文字を書くんですよ」
そして、口で説明するより実演を行った方が理解しやすいだろうと、ペンを取り出しメモ紙に【柳崎 玲】と自分の名前をスラスラと書いた。

それを見た義観と明心が、再び目を見張って驚く。

「なんと！ 墨も付けずに書けるとは！」と義観が、ボールペンをしげしげと見ながら言う。

「ええ。中にインクといって筆記に用いられる液体が入ってるんですよ」

「なるほどな。こりゃ便利だな」

「ええ、そうですね和尚。矢立やたてより持ち運びやすいし、すぐ書けますし」

義観も明心も、初めて知るボールペンに素直に感動しているようだった。

（これで、未来から来たって証明できたかな？）

「……あの、私が未来から来たというのは、信じて頂けたんでしゅうか？」

義観は、手にしていた手帳を玲に返し腕を組んだ。

明心は事の成り行きを見守るように様子を伺っている。

「その前に、聞きたい事が一つある……お主が後世から来たと言うなら、こちらの世に来る前の、お主の世での季節がいつだったのかが知りたい」

なぜそんな事を聞くのだろうか？ と不思議に思いながら玲が答える。

「春、でしたけど……」

義観は小さく「なるほどな」と呟くと、法衣の袷から小さな白い包みを取り出し、包みを開いた。

なんだろうと？ と意味が分からず見ていると、その包みから出てきたのは、一輪の桜の花。

「これは、倒れたお主の髪に付いていた桜の花だ」

義観は更に言葉を続ける。

「それに此処はな、寺格高く、宮門跡寺院であり徳川家の菩提寺でもあるんだ。境内におった民^{たみ}の者々は、毎夕見回りの者に門外へ追い出される。それが此処の決まりだ。

そして、黒門は翌朝まで固く閉ざす。夜番が嚴重で内の者なら兎も角、外の者は夜間に境内へ立ち入ることなど、まず無理だろうな。特にお主のような目立つ格好の女子が、ここへ入ろうものなら忽ち捕まってしまう。そのお主が黒門が開く前に境内にいた」

義観の言葉に、なるほど得心が行く、といった態で明心も頷く。

(……私、入れるはずのない時間帯に境内に倒れていたんだ……)

「この寺にお主が居ったこと、お主の装いに所持品、それにこの桜の花。

後世から来たなど、到底信じられん事ではあるが、信じないとなると、これらの説明ができません」

みなまで言わずとも、この意味がお分かりかな？ と義観が優しく

玲に微笑みかける。

その微笑みを見て、今度は玲が驚いて声を発した。

「えっ!?! ……あの、信じてくれたんですか!?!」

「ははっ、信じないほうがよいのかな?」

「いいいえ! そ、その何て言うか……あ、有難うございます」と目元を軽くほてらせながら頭を垂れお礼を述べる。

ひとまず信じて貰えた事で、ほっと胸をなでおろす玲。しかし、それも束の間のことです。

「……和尚。でも、この方これからどうするのですか? 後世から来たとなると、身を寄せるところもないのでしょうか?」

明心の言葉を聞いて改めて時を越えるということ、それはどういう事なのか、を自覚する。

(……そうか。私には、もう身寄りがないんだ。家族も友達も、もう誰もいない……。

これからは、どんなに辛い事があっても自分でやっていかなきゃいけないんだ。

……でも、ここで生きていくっていう事はそういうことなんだね……)

知人もなく頼る人もなく、それでもこれからは一人で生きていかなくにはいけない、という厳しい現実に気付く。

(……安政六年。つことは……幕末。

どうしてまたそんな思想やら世の変動の激しい、荒れ狂ってる動乱期に。

こんな格好して出歩いたりしたら、侍にバツサリメタメタにやられちゃうんじゃないの私？

とりあえず、着物はすぐに手に入れた方がいいわね。その後は……考えても仕方ない。どうなるかなんてわからない、こんな未知の世界じゃ)

これから身をもつて知っていくだろう動乱という世の中の秩序の乱れに不安を抱えながらも言葉を紡いだ。

「あの、大丈夫です。……ただ、一つだけお願いがあるんです。着物を……ボロボロでも、女物が無ければ男物でも、どんな物でも構わないのでどうしても着物が欲しいんです。お願いできませんか？」
気丈に言っただつもりだったが、最後まででは続かず語尾が震えてしまった。

気持ちを強くと、気丈に振舞ったが、やはりダメージが大きいようだ。

玲は滲んだ涙を見られないように俯き、嗚咽しそうになる吐息を堪える。

奇しくも時を越え、これまで生きてきた世が突如として一変し自分の知らない世へ来たのだ。

そればかりか身内とも離れ、頼れる者も誰ひとりと居なく身寄りがない。

探せば祖先はいるだろうが、それでもこの世では他人も同然だろう。

玲は、天涯孤独になってしまったのだ。辛くないわけがない。

両手を膝の上でギュツと握り、細くて小さな肩を震わせながら、玲は声を殺して泣いていた。

きつく閉じた瞼から零れ落ちた雫は、頬を伝うことなくぽたりぽたりと落ちてスカートに小さな染みを作りあげていた。

そんな様子の玲を見て、義観と明心も玲の気持ちを汲み取るが如く黙り込んでしまふ。

今の玲の辛く悲しい立場は、想像に容易い。

義観も明心も、静かに穏やかに、見守るような優しい瞳で玲を心配そうに見ている。

しばらく経ち、玲の息も整ったころ、口火を切ったのは義観だった。

「不思議なものだ、長い時を越えてこうして私達が出会う。これまで教えを説き説かれ仏の道を歩んできた。

これもなにか、仏のお導きなのかもしれん。大乘の精神、すべてのものを救おうとする利他の慈悲心は不可欠なものだ。そう思わんか明心？」

義観は、微笑みを浮かべながら視線を明心に移し、説くように言う。

「はい。私もそう思います。世のため人のため助け合い信頼しうる世の中とすることに、利己な心を忘れて尽くすことこそ、慈悲のきわみ。ですね」

「うむ、そうだ。径寸十枚是れ国宝に非ず 一隅を照らす此れ則ち国宝なり」

話しながら、満足そうに深く頷く義観。それを聞いていた明心も同様に深く頷いた。

そして、明心は義観に視線を戻すと、
「ですが、どうするのですか？居所はこの離れで問題はないでしょうが……」

と話しながら、二人の会話を聞いて呆然としている玲に視線を向ける。

「えっ？ えっ！？」

二人の会話は半分位しか理解できなかった玲だが、自分の今後が左右する会話だったことだけはわかった。

玲は、我知らず勢い良く身を乗り出して義観に問う。

「あ、あのっ、もしかして私をこのお寺に置いてくれるのですか！？」

そんな玲の勢いに少し驚き眉をあげた義観であったが、玲を安心させるように、ふわりと目尻にしわを寄せ穏やかに微笑んだ。

「そうだな。ずっと寺にという訳にはいかないが、身を寄せる所が見つかるまでは、当分ここへ居ればよい。身を寄せる所も追々私が探してあげよう」

見る見る玲の黒目がちの大きな瞳に涙が浮かんでくる。

これから自分はどうなってしまうのか、衣食住すべてにおいて何の確立も無く、ただただ真っ暗で一寸先も見えないほどに玲の前途は予測できないものであった。

正直なところ、今の玲がこの時代で生きてゆく事は、落ちるとわかっていいる綱渡りをするようなものである。

しかし義観により救いの手を差し伸べられ一筋の光が差した。

今の玲がこの世で生きるためには、その義観の優しさにすがりつくしか方法はない。

言うなれば、義観は玲の命の恩人という事になる。

(こんな過去の世界になんて来てしまって、正直独りでどうしよう

かと思ったけど助けしてくれたのが義観さんでよかった。

今は義観さんの言葉に甘えるしか出来ないけれども、まずは助けしてくれた義観さんに迷惑掛けないよう私も私なりにこの時代に馴染めるように頑張ろう。()

滲んだ視界の先には、義観と明心の微笑がぼやけて見えた。

玲は、浮かしていた身体を元に戻し両手で三角形を作るように膝前につき、きれいな所作で深く頭を下げ丁寧にお辞儀をした。

「ありがとうございます。お言葉に甘えて、これから宜しくお願い致します」

少しの間後、ゆっくりと頭が上がる。

するとそこには、大輪の花が咲くように優美で凜とした玲の微笑が。

微笑みを目の辺りにし、明心は慌てふためいて空中に目線を泳がす。

義観は、そんな明心に軽く苦笑する。

洗練された立ち振る舞いに、端正な顔立ち、まだ幼さの残る柔らかい表情だが同時にその意志の強そうな漆黒の瞳に危うさを秘めた少女。人を惹きつけてしまうのも仕方がない。明心の反応も無理もないな、といった風に。

「それで、これからここで過ごすのに二、三言っておきたい事がある」

「はい、なんででしょうか？」

玲は、なぜ明心がそのような反応をしているのかなど露ほども気にせず、涙を拭う手を止めて口を開く。

「うむ、まず、此処に居る間は勤めとして家政を、それと私の庶務についてもらう。これは、明心に教われればよい」

(家政って、炊事や洗濯ね。大丈夫、伊達に料理教室に通ってない

もの)

玲の祖父は、病院長と会社経営との二束の草鞋だった。

といつても、会社を興したのは祖父であるが実際、会社の切り盛りをしていたのは祖母、その祖母も今は亡くなり父が会社を引き継いだ。

年の離れた一番上の兄は父の秘書を、二番目の兄は大学を卒業し研修医。という、玲の一族は世間でいう上流階級の家柄であった。

そのため玲自身も物心ついた頃から厳しく育てられて教養はもちろん身を守る為の総合護身術、中等部からは料理や華道・茶道と、その他にも細々と色々な習い事をさせられてきていた。

「はい、わかりました」

「それとだ、お主は私の遠縁の者とする。私が後ろ盾になれる。その方が此処で過ごしやすいだろう」

いくら此処が寺とはいえ、この美貌だ。よからぬ事を考える者が居ないとも限らないだろう。

仏の道を行く者としてはあつては成らぬ事だが、なかには邪まな輩もいる。

そんな考えでの義観の配慮である。

「はい。では、僧侶のことはなんと呼べば？」

「ははは、そう畏まらなくてよい。そうだな、身内のように呼んでも構わんが、弟子ではないが和尚でもよい。どちらにしてもお主の好むように呼んだらいい」

「では…、おじ上と呼ばさせて頂いてよろしいでしょうか？」

ちよつと照れてしまいますね。と微笑みながら続けて言う玲に、義観も目を細めて微笑む。

僧である義観には、勿論子供など存在しないが、その微笑みは、まるで自分の娘に向けているかのように温かな微笑み。

「うむ。では、最後にこれが一番大切なことだ。

無闇に時を越えたと他言しないこと。いいか、それが知れ渡れば何があるかわからん」

(そうだね、この先の歴史を知っているんだもの、私が未来から来たとなれば抹殺されるか利用されるだけ。

義観さんは、それが言いたいのかな？ とにかく気をつけなくちゃ)

「はい、そうします」

と、玲は神妙な面持ちで深く頷きながら返答をした。

それを見届けた義観も頷き返し、一拍後、衣擦れの音をさせ立ち上がった。

「明心、玲に朝餉を出したら、おぬしは『いとう松坂屋』に行つて着物何着かに必要な物一式揃えてきてくれ」

明心は目線の高い義観の顔を見上げて、心得た、とばかりに「はい」と頷く。

「此処は、寺な上に大所帯の大寺院だ、慣れぬ事もあり難儀することもあるが、何か困ったことがあれば私かこの明心に言えばいい」
私はこれから勤めがあるから、また後で様子を見に来る。と義観は言い置いて部屋を出て行った。

衣擦れと足音が遠ざかり、やがて静かになる。

「あの、明心さん？ これから宜しくお願いします」
微笑み軽く頭を下げる。

「はい。しかし、良かったですね」

見つけたのが和尚じゃなかったら無事ではいられた。と、だから良かった。と安心したような表情をして呟く。

「それですね、当分はこの舎で過ごしてもらつことになると思います。

ここは墓地の近くなんですが、以前墓地を荒らす者がいたらしく、その見張りのためにこの舎を使っていたそうなんです」

だが今は墓地荒らしも無く使っていない空き家だから遠慮は要らない。と続けざまに言った。

「何から何まで、ありがとうございます」

玲は、恐縮しながら頭を下げた。

「生活に必要な物は、だいたい揃っていると思いますが何か不都合がありましたら言って下さい」
では、朝餉を持ってきます。と障子を開け明心は部屋を後にした。

時越え 参

突然時を越えてしまうという、なんとも奇妙な信じられない事態が玲の身に起きた、その数時間後の夕刻。

玲は命の恩人とも言つべき義観に連れられて、伽藍がらんが整然と配置されている境内の中を、きよろきよると目線忙しく歩いていった。

なにしろ広い、そして豪華な建造物、荘厳な寺院の威容に玲は目を白黒させる。

さて、そんな様子の玲は、はたして何処に向かっているのだろうか？

それは、今から半刻前の時刻に遡る。

食事も終え、無事に制服から着物へと着替え終えた玲は、暫らくは明心から此処寛永寺の事、それから勤めるに当たつての心得や説明を聞かされていた。

しかし修行僧である明心には勤めや勉学があるため、ずっと玲を構っている訳にもいかなく忙せわしく寺へと戻っていった。

その後、暇を持って余した玲は、住処となった家の探索をしていたと、言つてもそれほど広くはない。

こじんまりした土間には釜戸に流し台に勝手口、一段上がった所に板間があり、続きに六畳位の座敷が二間ある。

二間の中央は襖で仕切られ、縁側に面して障子。玄関がなかった。急遽作った家と言つていたから玄関は省かれたらしい。

外観は純和風の素朴な佇まい、離れに厠と井戸があり、家屋は林の中にぽつんと存在しているようで周りは木々に囲まれ、細い道が一本あるのみだった。

家屋の裏に回ると、監視所のように見受けられる見張り台のような高さ約八メートル位の木製の塔があった。

きつとこの塔から墓場を見張っていたのだろう。 などと思いながらウロウロしていたら、いつの間にか此処に来ていた義観に声を掛けられた。

座敷につき義観から話を聞くと、これから輪王寺門主の入道慈性親王というお方と公現法親王のお二方に会いに行くというのだ。

公現法親王は聞いた事があつたような気はするが、はて、誰だつたか？ などと考えていた所、義観により詳細を説明される。

輪王寺門主とは、親王宣下しんのうせんげを受けた皇族男子が出家して門跡もんぜきに入り、日光山輪王寺と、ここ東叡山寛永寺の住持じゅうじを兼務けんむ為さる、とにかく強大な権威をもっている崇高なお方。

そのお方が、現門主人道慈性親王。御年四六歳。

そして、次代の後継者になるべくお方、公現法親王は仁孝天皇の猶子ゆいしで昨年、東叡山寛永寺の門跡となられ入寺したのだと。御年十二歳。

それを聞いて驚いた玲は、恐れ多くて拝謁はいえつなどできないと伝えたのだが、

「先に御門主と宮に面会しお主の事を報告した際に『対したいので伴ってきなさい』と言われた」と、また「ここで過ごす以上はお主も黙っているわけにもいかんだろ」とそんな風に言われてしまえば、なまじ正論な言い分だけに断る事は不可能というもので、玲は渋々といった様子で了解したのである。

そんなこんなで拝謁が決まると、玲は失礼や無礼の無き様にと、小奇麗に身支度を整えて、とはいうものの、この時代風の身支度は玲にはできないので、下し髪だったウェーブの黒髪を夜叉巻きにして、持っていた蝶にスワロフスキービーズがあしらわれたコンコルドで髪を留め、身だしなみ程度に軽くお化粧を施しただけ。

そうして、玲は恐々とした様子で義観に伴われ宮のいる本坊へと向い歩いているのであった。

「あのそれで、私のことは何と伝えたんですか？」
前を歩いている義観に声をかける。

「ん？ 騙す様なことはしたくない。御門主と宮には在りのままの話をした。大層驚いてお出でだったかな」

はははっ。 と笑いながら歩いている。

「……そんなこと誰だって驚きますよ。時を越えた本人でさえ信じられないことなのですから」

義観の軽い感じが気に障った玲が言い返すと『おやつ』と眉を上げた表情で義観は振り返り立ち止まる。

しかし、何も言わず微笑んでまた歩き出した。

玲の父は、いつも多忙で日本にいないなんて事も頻繁にあり、それはなんら珍しい事ではなかった。

玲が幼い頃は、祖母が日本に留まり社長業務を、そして副社長の父は海外でビジネスをしていた。その後、祖母の引退を機に会社の拠点を海外に移した父は年に数回日本に帰国する程度となった。

そのような環境ゆえ玲は幼い頃から父と接する機会が極端に少なく、たまに会っても他人行儀なギクシャクしたもので親子という親子らしい関係を父と築いてきてはいなかった。

それでも兄達が居たおかげで家族愛というものに無縁だった訳ではない。

お世辞にも親子関係は良好とは言えぬが、兄妹関係は悪くはなかった。

しかし、二人とも年の離れた兄なため一緒に遊んだなどといった幼少時代の記憶は少ない。

玲が幼稚園に通い始めたころ母が亡くなり、それ以来ずっと寂しい思いをしてきていた。

義観のように優しく暖かい微笑みを、一度でも父から向けられたことがあつただろうか。

義観がくれる温かさに慣れない玲は、困つたような、でも何処か心が癒されていくような温かな気持ちになる。

これから、お目通りする事をすっかり頭の隅に追いやつた玲は赤く色づいた落ち葉の道を、にこにこ義観の後をついて歩いてゆく。すれちがう僧達が、玲の美貌に驚き注目していることなど、ちつとも気付きもせず。

義観に連れられ立派な屋敷の一室に通された玲。

しかしすぐに義観は、何処かへ行つてしまい一人広い座敷で待たさせられている。

一段高くなつた所から少し離れ、だだっ広い部屋の真ん中に、ぽつんと座っている玲は落ち着けずにいた。

二十帖以上はあるかと思われる部屋の奥は、一段高くなつていて円座が二つ置いてありバツクには大きく立派な額に収まつた墨で描かれた絵が飾つてある。

段の下がった両サイドには円筒形の行灯があり、更に玲の座っている辺りの両サイドと少し後方のサイドにも同じ行灯が置いてあつた。

暫らくすると障子の向こうから聞こえてきた衣擦れのような音。

その音は、徐々に近づいてくる。

(もしかして、御門主様と宮様?)

そう思った玲は、咄嗟に両手を膝前につき平伏し、暫し待つ。

親王などという雲の上の存在の方にお目通りになつた事など、もちろん経験のない玲は、いつか観た時代劇のドラマの中の役者がそうしていた様に真似る。

スツと、障子の開く音。頭を下げている玲には見る事は出来ないが、足音を確認するに、三・四人はいる様子。

一人、玲の傍に誰かが腰を下ろした。きつと義観だろう。暫らくして、みんな腰を下ろしたのか静かになった。

玲の表情が緊張で徐々に強張ってくる。

「玲とやら、面をあげよ。苦しうない」

玲は、緊張を押し隠し、所作美しく凜とした美しい姿勢で顔を上げる。

二人の人物が、部屋の最奥の一段高い場所に並んで座りこちらを見ている。

ひとりは、一目で上質な物と判る緋色の布に金刺繍で紋の入った金欄の袈裟を纏った、威風堂々とした威厳に満ちた壮年の男性。

もうひとりも、やはり上質な物と判る金欄の袈裟を纏った、まだ幼さの残る、けれど生まれ持った上品な気品を携えた少年。

思わず、ごくり、と喉を鳴らす玲。

しかし、喉を鳴らしたのはなにも玲だけではない。

玲の立ち振る舞いと美貌に、御門主も、まだあどけない少年の宮も息を呑んでいた。

義観から類を見ない美貌であると聞かされていたお二方であるが、なるほどと得心した様子と驚きを持って玲を見ていた。

すると、不意に玲が平伏した。

「御門主様、宮様、お初にお目にかかります。私は柳崎 玲と申します。まず初めに、この度は大変なご迷惑をお掛けしまして申し訳ありませんでした」

玲は平伏していた姿勢から頭を上げ更に口上の述べる。

「私は義観僧侶に助けて頂き、そしてこの程こちらの寺院の離れにてお世話になる事になりました。僧侶からお聞き及びかと存じますが、改めて私からもご報告させて頂きます。ならばに私がこちらで御厄介になります事を許してください、また格別のお引立に預かり厚く御礼申しあげます」

そう一気に述べ、再度深く頭を下げお辞儀をした。

その様は多少緊張しているようだが、それでも凜とした落ち着き

ある佇まいに、高い教養と矚が垣間見れる。

「うむ。そう硬くならんでもよい。そなたが、後世から来たのだと聞いた。哀別悲離、難儀であったな。しかし、是にも何か意味があるのだろう。そなたは、こちら側に来る宿命だったのだよ」

起こる変化に意味のない事はない、そうなるべくして物事は起こる。と優しい音色で告げる。

御門主の威厳に満ちた印象から、そんな優しい言葉を掛けて貰えるとは思っていなかった玲。

その御門主の思いがけない言葉に、玲の緊張も徐々に解れていく。しかし、緊張と引き換えに、今度は若干の不安が襲ってくる。

「勿体無いお言葉、身に染み入ります」

少し言葉を止め更に続ける。

「しかし、こちら側に来るのが宿命なのならば、私は何をする為に来たのでしょうか？ それが私には分かりません」

その表情からは、不安がありありと浮かんでいた。

この異常な事態に対する解釈と説明を、玲は求めているのであるう。

少しの間のあと、御門主が微笑みながら口を開く。

「案ずるな。季節が巡るように人にも巡り合わせがある。急がずとも、おのずと道は開けてくる。そして、導きだされた答えが見えてくるようになる」

続けて、宮が口を開いた。

「これから此処でいろいろ学び、己に何ができるか又、何がしたいか、まずは、そこから始めればよいのではないですか？」

宮は、明るい笑顔をたずさえながら問うように告げた。

いつか、時を越えた意味がわかる時がくるのだろうか？ そもそも、意味などあるのだろうか？ 今はまだその答えは分からないけれど、過去から来たなどと言って現れた自分を、助けてくれただけじゃなく、こうして自分を信じ心配し優しく接してくれる人達がいる。

血の繋がった家族はいないけど、義観のように暖かい父のように
思える人もいる。

こんな自分は、もしかしたら幸せ者なのかもしれない。

いつか、このご恩返しが少しでも出来るように今は、この世で自
分なりに頑張っていこう。今は、それでいい。と、胸の内と思
う玲。

「御門主様、宮様、暖かいお言葉、ありがとうございます。私、こ
ちらの世で頑張って生きていこうと思います」

そして、いつの日か出来る限りのご恩をお返しします。と、胸
の中で呟く。

玲の斜め前に座り、いままで黙って事の成り行きを見守っていた
義観が言葉を発した。

「御門主、宮、私からも重ねて御礼を申し上げます。この子は私が
責任を持って世話を致します故どうかご安心くださいませ。そ
こで早速ではございますが申し上げますね、この子の勤めの件でございま
す。……先程私が上申しました、この子の勤めの件でござい
ますが、僧達に混じって家政とは少々考えものやもしれません。」

この本坊に向うにあたってこの子を伴って参りましたので私はわか
りますが、いささか気がかりになりましたね……改めを考えており
ます」

義観は、ここに向う中、余りにも目立ち人目を惹きつける玲を目
の辺りにして心配になってきたのだ。

それに、なにやら玲は自分の外見を何とも思っていない平然とし
た様子で、見ている義観の方が気がでないのだ。

「あのっ！ 私ここに来る途中、何かご迷惑お掛けしましたか？」
義観の申し立てを聞いた玲は 自分が何か失態を犯したのでは
ないか？ と焦りながら言葉を発した。

「何かしたのなら謝ります。でも、少しでも何かの役に立ちたいん
です。料理も洗濯も、私頑張りますから大丈夫です」と必死な様子
で義観に述べる。

その言い分を、困った表情で耳を傾ける義観。

その様子を険しい表情で眺めていた御門主、しかし、それは誤魔化した表情だったらしくいきなり大声で笑い出した。

宮も、隣でケタケタと御門主と一緒に可笑しそうに笑っている。

義観も玲も、何が起こったのかわからず、笑っている御門主と宮を呆然と見つめ返す。

暫らく経ち、笑いがひと段落したのか御門主が、一つ咳払いをして、

「いや、失礼した。なにか微笑ましくてな。

義観が困っておるとな、そんな珍しいこともあるのだなと思つたら、その一因がこの玲殿だ、可笑しくてな」と言い、また可笑しそうに表情を崩して「義観そなた、玲殿の父上のようなだ」と言つて堪え切れなくなったのか再び笑い出した。

それを聞いた義観は、固まり呆然としていたが、暫らくして自分でも可笑しそうに、

「その通りでございますな、私が頭を悩ますなど。これが俗に言う親馬鹿なのでしょうかな？ 私もずいぶん丸くなったものです」と言つて、御門主と宮と一緒に笑い出した。

まだ出会つて僅かであるのに、義観の暖かさは玲に安心感を与えてくれ、心を穏やかに保たせてくれる。

玲にとって、既に全幅の信頼をおいている義観はまるで父のような存在である。

その義観と御門主のその言葉は、くすぐつたくも嬉しい言葉の贈り物。

玲の父は、親馬鹿などには程遠い人物であつた。玲自身も父に親馬鹿と言われるような存在になって欲しいなどと考えた事も無い。

でも、今こうして義観が自分を心配し自分のために頭を下げ行動をしてくれている。

それがなんとも、こそばゆく、更には喜んでいる自分がまるで甘えているようで恥ずかしくなる。

そんな自分を発見した玲は、頬を紅潮させ恥ずかしそうに俯いた。そこに、宮がニコニコと柔らかい微笑みを浮かべながら、玲に声を掛ける。

「玲殿、義観は玲殿をお子のように思っているようです。頑固で融通の利かない所もありますが、きっと玲殿のお力になってくれますよ。頼もしいですね。でももし、迷惑する事があつたら私におつしやってくださいね、叱っておきますから」

それを聞いた義観が聞き捨てならんとばかりに　宮っ、何をおつしやる！？　と笑いを止め言葉を発した。

しかし、尚も宮は変わらぬ笑みを携えて言葉を続ける。

「玲殿、今度私に後世のお話をお聞かせてくださいね」とニコリ微笑んで。

玲は、過去に来て悲しいはずなのに、何故かとても幸せを感じる今の状態を不思議に感じながら、

「はい。おじ上は、とても頼もしいです。　それに宮様とお話できること楽しみにしております」と本日二度目となる大輪の美しい花を咲かせた。

その満面の笑みを見た、宮も御門主も同じように深い笑みを浮かべる。

そして義観も、先ほどの宮の言った言葉は大して気にしていなかったのか、やはり同じように満面の笑みを浮かべていた。

下弦の月が浮かぶ夜空を、縁側に腰掛けゆつたりと眺めながら、玲は目まぐるしかった一日を振り返っている。

あれから、義観と御門主の二人が話し合い、玲の勤めの改めが決定された。

とりあえず、仕事始めは明後日からになり、仕事内容は、朝の境内の掃除と洗濯、それと義観の仕事の手伝い。

後はたまに、宮が勤めも勉学もなく暇な時の話し相手というものになったのだ。

しかし、それでは余りにも楽ではないか？ と玲は異論を唱えたのだが『今は、この世に慣れることが大切なことだから』と、義観も御門主も宮も中々頑固で変えてもらえない事はなかった。

「はあ……良いのかな？ 甘えすぎじゃないかな、私」
裸足に草履を履いた足元の落葉が、冷たい風に巻き上げられ飛んでゆく。

時折吹く風は肌を刺すように冷たく、長い冬がもうすぐそこまで来ている事を告げている。

「さむつ、そろそろ部屋戻る」

縁側に上り、一枚だけ開けていた雨戸を閉める。

部屋には行灯と敷かれた布団、もう寝る準備は万端である。

しかし、眠くて当たり前のはずが不思議と目が冴えてしまっていて眠くならない。

ふと、部屋の隅に置いた自分の荷物に目がいく。

「荷物チェックでもしようかな。何、入れていたっけ？」

荷物を布団の上に移動してバックを開ける。

（えーと、携帯に筆記用具、ノート、手帳、電子辞書、うち合せした時の書類各種、手鏡に香水、化粧ポーチ、財布、腕時計、ハンカチにティッシュね。あと）
「忘れちゃいけないのが」

と言って、部屋の隅に片付けられている特徴ある形の黒のケースに視線を寄せる。

「ヴァイオリン！」そう言って玲は柔らかい微笑みを浮かべる。

そして、バックからガサガサとビニール製の二つの袋を取り出し、更に二つの紙袋を傍に寄せる。

大きい紙袋の方から順番に開けていく。

ブティックで購入した物は、黒のウールのケープコートとベレー帽。

花屋で購入した物は、ハーブの栽培キット、ガーデンエプロンとガーデンシユーズのセット、それと海外のセレブに人気だという理由で店員さんにゴリ押しされて購入したグロー ブルスのゴム手袋。「この時代じゃ、使えるかどうか微妙なものばかりね……でも、このコートなら地味だしこの時代でもイケそうかな？」

更にガサガサとビニールの袋を開けていく。

「雑貨屋さんで買ったのが、新作の香水とヘアーゴム。うん、こっちはなんとか使えそうね」

最後に書店の袋を開ける。

「お風呂上がり試してみようと思って買った、足ツボの本と……医学の参考書……か」

本を手に、一つため息をつく。

玲は、密かに将来は医者になりたいと思っていた。

もちろん祖父と兄が医者ということでも多少の影響は受けているが、それよりも母が病気で亡くなったという要因が玲にとっては大きい。当時幼かった玲は、母のためにして上げられる事は何もなく、それは幼子心にも悔しい思いをした記憶が今も色濃く残っている。

そして玲自身も母を亡くして以来、寂しい思いをしてきていた。病人を治す事は勿論、自分のように悲しい思いをする人が一人でも多くいなくりますように。と願い、出来るなら医者になりたいと思っていた。

しかし、それも夢で終わりそうだ。

なんせ、この世界では医療のレベルが違いすぎる。

現代では簡単に薬で治せる病気も、この世界ではその薬から発明していかなくてはいけない。

医療道具もそうだ、余りにもレベルが違いすぎる。

「はぁ……もう寝よう」

考えても仕方がない。と荷物を片付け始める玲。

片付けついでに、ぐっすり眠れるようにとアロマ代わりに、買ったばかりの香水をつける。

行灯を消すと真っ暗で、目を開けているのか閉じているのかさえ分からない。

（ほんと、すごい所に来ちゃったな……でも、不思議と嫌じゃない。御門主様が言ったように、こちら側に来るのが宿命で何か意味のある事なのならば、私はそれを受け入れよう）

改めて、こちらの世界で頑張っていく事を胸に誓う。

「さて、明日はこの家に家財道具入れるって言っていたから忙しいぞ、ほんともう寝なきゃね」

と、一つ欠伸をして瞳を閉じる。

外では、澄んだ空気の中、青白く圧倒的な美しさを誇る秋独特の月と星達が玲を歓迎するかのように光輝いていた。

時越え 参（後書き）

投稿する際に文章を読み返したり、投稿した後も自分で気付いた時には修正をしているのですが、それでもまだ見落としがあるかもしれないかもしれません。

恐れ入りますが、お読みになっていて誤字・脱字、または読みづらい文章を発見された場合は、ご報告頂けると助かります。

お手数お掛けしますが宜しくお願いします。 胡竹

新たな日常 壱

あの信じられない事ばかりが起きた怒涛の日から、約一週間。

『郷に入っては郷に従え』とはよく言ったもので、初めは玲の現代での生活習慣の表れた行動やこの時代での生活習慣の無知さ故の行動で、何をするにも周囲を驚かせた玲であったが、徐々に玲がこちらの習慣や風俗を覚え始めると皆の反応もそれに伴い通常のものに変わってきた。

……と、玲は思っている。

実の所、今でもまだまだ玲はこちらの時代色には染まりきってはいなく、皆の方がたまに珍妙な行動をする玲に慣れてきたと言ったほうが正しいのかもしれない。

兎にも角にも、そんな玲も玲なりに今ではこちらの生活にようやく慣れ始め、朝一の仕事である境内の掃除は勿論、その他の仕事やこちらの時代での一般の生活・習慣も徐々に板に付きつつあった。

そして今は、僧坊（僧侶達が生活するための建物）の一角にある井戸端で沢山の僧達に交じって洗濯仕事に精を出していた。

この季節の水の冷たさには少々難儀するが、手洗いでの洗濯も今では手慣れたものである。

洗いが終わると、これまた慣れた手つきで次々と洗濯物を干していく。

「ふう、終わった！」

干した大量の洗濯物を眺め微笑む玲。

その様子を、作業をしながら僧達がチラチラと見ている。ある者は珍妙なものを見るように、ある者は恍惚として。

玲のその美貌と、髪を日本髪に結われない変わった風貌はとも目立つ。どこにいても、視線を集めてしまうようだ。

「さて、おじ上の所に行きますか」と、次なる仕事のため玲は義観

のいる院へと向っていく。

「おじ上、参りました。玲です」

障子を前に廊下から声を掛ける。

「来たか、入りなさい」

義観からの反応はすぐにあり、玲は「はい」と言葉を返し室内へと入る。

義観は文机で筆を手に流れるような筆づかいで紙に麗筆を揮^{ふる}っていた。

玲は畳に腰を下ろし、その達筆な筆づかいを目で追う。しかし、玲にとつて崩し字の草書は芸術のような物で読めはしない。

「草書は読めませんが、いつ見てもその達筆な字体には見入ってしまえますね」と、筆先に目線を貼り付けたまま独り言のように呟く。

義観は、目線を上げ筆先に熱視線を送り続ける玲を見て可笑しそうに少し口元を綻ばせ、そしてまた続きの筆を執る。

「玲は、草書が苦手なのか？」

「苦手というか、私がいた時代では楷書字形が一般的でしたので、草書は教わりませんでした」

でも、これから少しづつ覚えたいと思います。と玲は続けて言っ

た。
「そうか」と言うと義観は、何か思い出したように続けて言葉を述べた。

「昨日も、宮から呼ばれたのだから？ 失礼は無かったか？」

そう、玲は初めてお目通りしたあの日から度々宮に呼ばれ、宮の居所に訪ねているのだ。

だが、何も特別なことはしていない。

寺での暮らしぶりについてや互いの話、玲の住んでいた未来の話をしたりしているだけなのだ。

「はい、特にご迷惑はお掛けしてないと思いますが。何か言ってお

られました?」

「いや。それならいいんだ。今朝、宮にお会いしたとき喜んでおられたぞ。玲は、面白いと」

”玲は面白い?”それはどんな意味を指すのか? と腑に落ちないといった顔を玲はしている。

玲の現代人感覚での考えや行動は、宮のみに限らずこの世の人からしてみれば不思議なもののだが、宮はそんな玲を面白いと言っているのだ。

だが、玲は自分がそんな常軌を逸しているなどとは思っていない。

「私、何も面白い事なんてしてないけどなあ……なんでだろ?」

と、考えるように首を傾げて小さな声で独り言を呟く。

その様子を見て義観が笑う。

「昨日、一緒に御膳を頂いたんだろう? 宮が言っておられたぞ」

それを今朝聞いた時には、随分肝を冷やしたぞ。と続けて話す。

「えっ? 一緒に頂いちゃ不味かったですか?」

なんと玲は、昨日宮と共に夕餉を頂いたのである。

それというのも、宮に未来の生活についての話をしている、もちろん政を抜きにした一般的な当たり障りのない話。

そんな会話の中で、未来の世では食事は仲のいい者同士または、自分の家は家族の皆が揃う事は稀な事で滅多になかったが、家族と一緒に食べるのが普通なのだ。という話をしたら宮は、自分はいつも一人で食べている、いままで誰かと一緒に食べたことはない。と言っただ。

一人で食べる寂しさを知っている玲は、宮もしかしたら寂しい思いをしてきたのではないか? と思いつでは、今日は私と一緒に夕餉を食べませんか?」と誘ったのである。

だが、宮からすれば御膳を一人で食すのは当たり前の事。

玲の話聞いて述べた事も、ただ自分の場合はこうだ。と意見を述べただけに過ぎず、一緒に食べようなどと言う玲に宮は驚いていたのだ。

「常人は考えんだろう。宮と御膳を共にするなど恐れ多いことを」

そうは言うが、義観の顔は笑顔である。

「でも、いつも一人で食事をしているって。それって、寂しくありませんか？ それに、一人で食べるより誰かと一緒に食べた方がご飯もより美味しく感じられますし、何より楽しいですよ」

と、少し悲しそうな顔をして言う。

「そうだな、宮のように身分が高いと御膳も一人で摂るのが常だが、幼子の頃は寂しいと思ったことがあるかもしれない」

だからかもしれない、宮は大層喜んでおった。と筆を置きながら優しい表情を玲に向け言った。

それを聞き玲は嬉しそうに、はにかんだ表情で義観に問う。

「では、また一緒に御膳を頂いてもいいのですか？」

「ははは。宮次第であるが、その宮が『よし』としておるんだ。私は止めません、好きなようにしたらいい」

だが、失礼の無き様にしなさい。そう言うつと、義観は書き終えた紙をたたみ玲に渡してきた。

玲もそれを腕を伸ばし受け取る。

「これは、なんですか？」

「うむ、使いに行つてほしいんだ。その文を主に渡してくれればいい。ついでに街を物見して来たらいい」

と、言いながら玲のために用意しておいたのだろう真新しい江戸地図を文机の引き出しから取り出し、行き先は此処だ。と指で指し示して玲に見せる。

「はい、わかりました」

「この地図を持って行きなさい。あと、これは金子だ。何か欲しいの物でもあつたら買いなさい」

と、布製の小さな袋を手渡される。

玲は、驚いて顔を上げる。

「えっ、いいのですか？」

「まったく金子を持っていないのでは心許無いだろう。持って行き

なさい」

それに、少しばかり玲には遠いかもしれん、疲れたら駕籠を使いなさい。と続けて言う。

玲は嬉しそうに顔を綻ばせ、手を突いてお辞儀をする。

「おじ上、ありがとうございます」

見慣れた美しい所作で立ち上がると、玲はもう一度お辞儀した。

「おじ上、では行って参ります」

「うむ、気をつけて行くのだぞ」

くれぐれも、怪しげな輩には付いて行かれるなよ。とまるで父のような事を言い玲を送り出した。

玲は、寺門を出ると地図を見ながら闊歩^{かつぽ}する。

今回、義観に頼まれた使い先は、なるほど結構な距離がある。

しかし、それでも玲は嬉しそうに歩く。

実は、いままでも二度ほど義観の使いに出た事があるのだが、その時は明心も一緒だったため、ゆっくり街を見物するような事は出来なかった。

そのため今回の一人での使いは心置きなく街見物もできるというもので、妙に心が浮き立ってしまうという訳だ。

活気あふれる街を、興味深げにきよろきよろと辺りを見て歩く。

人々も明るく賑わい、沢山の人がいる。

日本髪を結った女の人達、お店の看板娘なのだろう若い娘さん、鬘の町人風の人や、お武家の侍が沢山居る。

思わず「うわあ、ちょんまげ本物だよ。初めてこんな近くで見るう！」などと胸の内ではしゃいでしまう。

寺にも寺侍という主に寺の管理運営などをする職種の侍や渡り用人という武家奉公人がいるのだが、玲は会う接点もなく遠目でしか侍を見ていない。目下のところ玲の周りは坊主頭ばかりだ。

すれちがいざま、ばれない様にそれでも興味深げにまじまじと頭

部を覗き見ている玲。

そんな玲は知ってか知らずか、やはり、ここ江戸の街中でも目立ってしまうようである。

その容姿もさることながら、内から溢れる品の良さも人々を惹き付けてしまうのだろう。

道行く人々がチラチラと玲を見ては通り過ぎる。

自分が注目を浴びているとは露ほども気付かない玲は、すれちがいざまにやたらと目が合う人々に挨拶代わりの会釈を軽くする。

先程も、玲の正面から歩いて来た青年武士三人組とすれちがう際に、目が合い軽く会釈をした玲。

青年達は玲に会釈をされると足を止め慌てたように返礼をした後、三人とも玲に道を譲るように後ろに下がり何も言葉を発さず、ただただ無言で玲がすれ違う様を見送っていた。

(うわあ、流石は武士！ 礼儀正しいわ……それにちょっと怖いけど道を開けてくれるなんて紳士的でもあるんだね)

と玲は若干の勘違いをしたようだが本当の所、彼らは驚いて思わず足を止めてしまったのであって、その後の道を譲ったかのように見えただ行動もただ驚きをもってした脊髓反射的な行動であり、紳士的に玲を見送っていたというのも、ただ心此処に在らずといった様子で惚けて玲の姿を眺めていただけに過ぎない。

と、玲は自分の容姿の無自覚さと天然な行動で、なにやらこの道中 やはりと言うべきか何と言うべきか気付かぬ内に周りを振り回している節がある。

程なく歩いていくと一軒の建物から美味しそうな香りが微かに香ってきた。

その建物の前に行くとその処はどうやら蕎麦屋のようだった。

時刻はそろそろ昼時、そういえばと玲は少し前から鳴いているお腹をさする。

玲は此処で食事をしていこうと決めると、おもむろに巾着袋から

手帳を取り出した。

それはメモページ以外の、学校の理念や学則、スケジュールなどの管理機能のページをバインダーから外してメモ帳として現在使用している生徒手帳。それらを外したおかげで、だいぶ軽く薄くなった。

その手帳を開くと、なにやら色々書かれたページを玲は読んでいく。

そこには、この時代のお金の説明や色々な物の物価が書かれている。

それらは日頃、明心から教わったものを書き記したものである。寺で生活する上での細かい事柄から、お金の説明や物の価格、更にはあまり必要のなさそうな知識である江戸の名産物など様々な事が書かれている。

ちなみにメモ帳として使用し始めたこの手帳に一番に書かれたものは、洗濯の仕方だ。書くほどの事柄ではなかったのだが仕事初日に洗濯で大失態を犯した為、もう二度と失態を犯さないようにと一応書き記したものであった。相当、恥ずかしかつたのであろう。

そんなこんなで、玲はその手帳を見てお金の使い方と蕎麦の金額を確認する。

(蕎麦は……十六文ね。あとお金は……丸くて真ん中に穴の開いた小さな銅銭ね。OK！)

そして、義観から貰った布袋の中身を見る。中には、金の四角く小さいお金や玲の探し求めていた一文銭が沢山入っていた。

(うん、大丈夫！ いざっ、出陣！)

そう心の中で言うと、玲は暖簾をくぐる。と同時に元気の良い声で「いらっしやいました」と女性の声に迎えられる。

声の主を見るに玲より三、四歳上の娘だろっ。

お店の中には四名のお客がいた。

玲は空いている右側中ほどの席に座ると、普通の蕎麦を注文をした。

程なくして蕎麦は運ばれてきた。がしかし、その蕎麦の上には天ぷらが載っている。

玲は自分が注文したものと違う事に気付くと声を掛けた。

「あの……間違っていますよ。わたし普通の蕎麦を頼んだのですが……誰か他のお客さんが頼んだものではないですか？」

すると娘は二カツと笑い手を振りながら、

「いいの、いいの。店主、あつ私の父ね、その父が天ぷらを載せろってうるさいからさ。気にしないで食べてよ」と江戸っ子らしい気風の良い調子で言葉を述べる。

「は、はあ」

玲は勢いの良い彼女に押され気味になりながらも腑に落ちない様子で返事を返す。

すると彼女は更に言葉を述べた。

「いや何？ あなたそんな格好して誤魔化してるようだけど何処か立派なお屋敷のお嬢さんとかじゃないの？」

首を傾げてそんな質問を聞いてくる。周りを見ると厨房から顔を覗き出した店主らしき人や店内のお客達も聞き耳を立てていたのかうんうん。と玲を見て頷き合っている。

「え？ ええ？ ちつ違いますよお！ 私はただの庶民です」

と何故に彼女達はそんな誤解をしているのかと玲は焦りながら言葉返す。

すると娘が意地の悪い笑みを浮かべて、

「まあまあ、落ち着いて。これ以上野暮な事は聞かないからさ。でもさ、折角ウチみたいな店に来てくださったんだ。とてもじゃないけどお姫様にお出するのに、汁に蕎麦だけの質素な蕎麦じゃ、ウチの店の名が廃るってもんでしょ？ ウチで出せる上等なものって言ったら天ぷら蕎麦なんだ。ウチの天ぷらは絶品だよ。美味しいからさ、食べてってよ。ね？」

じゃ、ごゆっくり。　　と言い置いて満面の笑みを向け去っていった。

玲は何が何やら？　といった風に脱力したように頂垂れ呆然とした。

どうやら彼女、否、このお店にいる人々は　玲の醸し出す雰囲気からだろうか　玲を何処ぞのひとかたならぬ出の人物であると勘違いをしているようである。

確かに未来から来ているという点で言えば、ひとかたならぬ出の人物の玲ではあるが、その事情を知らない彼女達が言うひとかたならぬ出の人物とは意味も次元も違う。

つまるところ彼女は、玲が家格の高いどこぞの武家や豪商の娘と思っっているようなのだ。更には、玲が何か訳ありの家出かお忍びの類で出歩いていると思っっているらしい。

いきなり過ぎてそこまで考えが及ばない玲は思案する。

（どうして私が姫？　意味わかんない……あつもしかして、この辺に私に似た姫様でもいるとか？　そうか、勘違いしてるんだ）

とやはり自分の容姿に無自覚の玲には気付く事は不可能と言うもので、導き出した答えは極短絡的なものであった。

誤解を解こうと彼女を見ると、玲の後にゾロゾロと入ってきたお客の相手でも忙しそうに立ち回っていた。そんな忙しそうな彼女に声を掛けるのは躊躇われる。

玲は、目の前に置かれた蕎麦をみつめ考える。

（なにやら誤解は生じているけど、この蕎麦は私にとって作られたものなんだよね。誤解だからって食べないのも悪いし、せつかく作ってくれたんだから頂く）

それに、お腹の空腹はピークである。先程から腹の虫が合唱をしている。

玲は、背に腹は代えられないとばかりに箸を手に取り蕎麦を頂き始める。

彼女の言った通り天ぷらがとても美味しく、玲はぺろりと天ぷら蕎麦を平らげてしまった。

そろそろお店を出ようとお茶を呑みながら彼女を見ると今だ忙しそうに厨房と客間を行ったり来たりしていた。

（誤解を解くのは無理そうね。忙しそうでそんな話してる暇が無さそうだもん、諦めよう）

玲は壁に貼り付けてある品書きの『天ぷら 代二十四文』と書かれた紙を見て、代金の二十四文を布袋から取り出し卓子の上に置いて席を立つ。

そしてお客さんに運ぶ蕎麦を載せたお盆を手に今も忙しそうに動いてる彼女に向かって、

「ご馳走様！ 代金は置いときましたから」と彼女に微笑んで玲は言った。

すると彼女は、あっ！と何か言いたそうな顔をしたが玲は気にせずにお店の暖簾をくぐった。

「なんか誤解してるし、代金要らないとか言われたら困るからね。ここは帰るが吉ってね」

と小さな声で呟くと玲は足早に店を後にした。

どの位歩いただろうか。

玲は、持ち歩いている腕時計を取り出した。

この腕時計、時を越えた時にしていた物なのだが、玲はこちらの時刻に合わせ直して使っている。

寺を出てから既に二時間半以上が経っていた。

休み休み歩いて来たが、こんなに歩くことの無い現代人の玲には少々きつい。

（結構歩いたなあ、疲れてきたよ。でも、駕籠を使うたって何処で駕籠頼めばいいわけ？）

そう、玲は肝心な事を聞き忘れていた。

駕籠に乗りたくとも、何処に行けばいいのか、誰に頼めばいいのか、が分からないのである。

「失敗したなあ、すっかり聞くの忘れてた……しかたない、頑張つて歩くしかないか」

帰りは、使い先のお宅の人に頼んで駕籠で帰ろう。と一人こちりながら、まだまだ遠い目的地に向かって玲は再び歩き出した。

新たな日常 壱（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

お気づきの方もいらっしやっただかと思えますが、一部誤った表現などがありましたため、追って修正を行ないました。

次回からも、自分で気が付いた時やご指摘を頂いた時など、その都度修正をして参ります。

また、表現の未熟な文や必要の無さそうな文などがあつた時なども、書き加えたり削ったりして修正をしていきたいと思えます。

その際に、あまり物語の内容までは弄りたくないのですが、必要に応じて内容を変更する事もあるかもしれません。

その時には、ストーリー展開には影響が出ないように致しますので大目に見て頂けると助かります。

なにぶん物書き初心者で、まだまだ手探り状態ですので、試行錯誤しながらなんとか頑張っています。

本作品を読んで下さっている皆様、どうぞ生暖かい目で見守ってやって下さいますようお願い申し上げますm(´`´)m

またお読みになっていて誤字・脱字、または読みづらい文章等を発見された場合には、是非ご指摘下さい。

ありがとうございましたと思えます。

お手数お掛けしますが重ねて宜しくお願い申し上げます。 胡竹（0

8 / 0 9 / 2 3 ）

新たな日常 貳

しばらく歩くと、先にある橋の袂たもとにできた人垣が、玲の視界に入ってきた。

すれちがう者達が、ありや、もう駄目だな。などと口々に囁きあっているのが聞こえる。

次第に人垣が近くなると、玲の所にまで届く女の叫び声が聞こえてきた。

何事か？ と思った玲も急ぎ足で駆け寄り、人垣の間から様子を窺う。

すると、何があったのだろうか、女は地べたに座り子供を抱きながら咽び泣いていた。

抱かれた子供は、全身びしょぬれでグツタリとし、酷く顔色が悪い。

「どなたかお助けをっ！ 坊やが！ 坊やが川に落ちて溺れたんです！ 誰か！」

母親だろうと思われる子供を抱いた女が、助けを求め泣き叫んだ。玲は、人垣を掻き分け、二人の居る場所へと駆け寄る。

考えるより先に体が動いた。

玲は母親の傍らに膝を突くと、子供を母親から抱き上げ地面に寝かせながら、矢継ぎ早に母親に問うた。

「水中の中にはどの位いましたか？ 助け出してからは、どの位の時が経っていますか？」

一瞬何が起きたのか、と呆けた顔した母親も玲の質問に、はっ、として答える。

「あつ合わせても四半刻も経っていません！ ほんの少し目を離れた隙で！」

（て事は多くみても三十分も経っていないって事ね……細かい時間が分からないから何とも言えないけど、意識が無くなってからそん

なに経っていないなら助けられるかもしれない！）
考える間にも、手早く意識や呼吸の有無を確認していく。

子供は意識もなく、呼吸もなかった。

玲は、舌根沈下を防ぐため気道を確保をし、次いで鼻をつまみ胸が膨らむのを横目で確認しながら息を吹き込み始めた。

その玲の行動に驚いた周りの人々が、ざわつく。

しかしながら、今は、それに構っている時間はない。

続いて玲は、坊やの脈が触れるかを確認するため、素早く首に指を当て頸動脈の拍動を確かめた。

（脈がない。 心臓が止まっている！）

玲は内心焦りながらも、胸に両手を重ね置き心臓マッサージを始めた。

（……二十八、二十九、三十！）

心臓マッサージを終えると、もう一度、呼吸の有無や体に何らかの動きがあるかを確認する。

されど 反応は、無い。

玲は諦めず、再度、人工呼吸を始めた。

時折、反応の確認をしながらも、繰り返し繰り返し、人工呼吸と心臓マッサージをする。

時間が経つにつれ玲の額には、徐々に汗が浮き始めていた。

「お願い！ 戻ってきて！」

と、何度目かの心臓マッサージに入ろうとした、その時 。

「げぼっ！」

子供が、水を吐き出した。

「鶴之助！！」

母親が涙を流しながら子供の下へと飛びつく様にいざり寄る。

男の子は、まだ意識がはっきりしないのか虚ろな目をしているが、それでも母親の声に反応するように顔を母親の方へと向けた。

「鶴之助君ってどういうのね？ 鶴之助君？ これは感じる？」

と言うと玲は、坊やの手や足の指をギュツと抓み、順番に感覚があるか確認するために触診していく。

感覚があるようで、坊やは弱弱しくではあるがきちんと頷いた。

こちらが言っていることも理解しているようだ。

「じゃあね、これは幾つに見える？」

と玲は指を二本立て坊やに見せる。すると、

「……に……」と坊やは小さな声で答えた。

「そうだよ。偉いね」と玲は坊やにニッコリと微笑む。

そして、ちよつとごめんね。と言いながら、坊やを抱くようにして仰向きだった坊やの体勢を横向きにして寝かせた。

まだ水を吐く可能性があるために体勢を変えたのである。

そして、玲は虚脱状態の母親に視線を向けると、

「お母さん、もう大丈夫ですよ。安心して下さい」と告げた。

玲は伝え終わると、自分こそ安心したのか気が抜けたようにペタンと地べたに座った。

「ほんと……よかった……」

玲は呆然とした様子で呟いた。

するとその玲の呟きがかきつけかけの様に、周りの人々が信じられないといった様子で「子供が生き返った！」と騒ぎ出した。

中には、夢でも見ているのではないかと自分の頬をつねったり叩いたりしている者までいる。

この時代の人々は、玲の行っていた救出法を知らない。
人間を生き返らせるといふ神業とも思える事を、やってのけた玲
に誰もが衝撃を受けているのだ。

暫くすると我に返った坊やの母親が、玲の目の前へと来た。する
と、地面に手を付き深々と頭を下げてきた。

「この子を助けて頂いて有難うございました。この子はやっと授か
った一人息子なんです。このご恩は決して忘れは致しません」

母親は、体を震わせながらも、なお深く頭を下げ続けている。

玲は、その震える肩に触れ、

「お母さん、やめてください。頭を上げて下さい」と継げ母親に頭
を上げてもらう。

「私は大した事をしていません。坊やの生きたいと思う気持ちが強
かったから助かった。私は、その手助けをしたまでです」

ほんとうに助かってよかった。と満面の笑みを向けて玲は母
親に言った。

すると母親は、今、目の前の人物の姿に気付いたかのように瞠目
する。

玲は、立ち上がり着物に付いた汚れを懐紙で拭う。

しかし、水に濡れた土の上で心肺蘇生を行っていたため、懐紙で
拭って落ちる類の汚れではない。

膝から下、袖下にお尻、他にも跳ねた所や手で触った所が泥で汚
れてしまっている。

（あらあゝ見事に泥だらけ。でも、命を救えた代償がこれなら
安いものよね）

などと、玲が考えていると、

「あのっ、どつどちらの、お武家様の娘さんでしょう？ 助けて頂
いたお礼をしたいのですが」

と、母親が声をうわづらせながら問うてきた。

日本髪を結っていないおかしな姿でも、奥ゆかしさと凜とした、

その美しさは変わらない。

蕎麦屋の人々がそうだったように、また、少し風変わりの武家の娘だと勘違いしたのだろう。

「いえつ、お礼なんてとんでもないです。それに私、お武家ではありませんし、お礼は結構ですよ」

と返すが、なおも母親は食い下がる。

「お武家様では、ないのでですか？ それでは、どちらのお医者様で？」

「いえいえ。医者でもありませんから、どうぞお気になさらず」

「では、どちらにお住まいで？ お名は？」

先を急ぐ玲にとって、この永遠に続きそうな、やり取りは困りものだ。

（困ったな。なるべくなら名乗りたくないんだけどな……でも、こんな事続けてるんじや、坊やが可哀想。早く暖めてあげないと）

そう考えると玲は、やむを得なく折れる事にしてお辞儀をした。

「私は柳崎 玲と申します。 おじが僧職をしております、今は訳あって東叡山寛永寺にお世話になっております」

それを聞いた母親は、驚いたように目を丸くする。

（やっぱり普通驚くよね。こんな小娘が寛永寺に住んでるなんて言ったら。 皇族が歴代門主を務める宮門跡寺院で、徳川將軍家の

祈祷寺であり菩提寺で、天台宗関東総本山だものね……）

玲は苦笑しながら言葉を続けた。

「あの……坊や、早く家に連れて帰って暖めてあげてください。このままじゃ風邪を引いてしまいますから。 それと、飲み物を欲しがると思いますが。そのときは冷たい物ではなく温めぬるの物を与えてください」

使いの途中ですので、この辺で失礼致します。お大事に。 と誤魔化すように一気に話すと、玲はそそくさと退散を決めこむ。

未だ呆然としている母親に一つ苦笑いを零し、玲は体を進行方向へと向けた。

するとそれまで事の成り行きを眺めていた野次馬の人々がざわめきを起こす。

玲は、その思わぬ光景に吃驚する。

坊やの救助に必死になっていた玲は、今の今まで人垣を作る人々がいた事をすっかり忘れていた。

そこには未だに沢山の人々があり、それも当初、玲が見た人垣よりも遥かに多くの人が集まっているかのようだった。

（なつなに？ いつの間にこんなに集まったの？ もう、坊や助かったから帰っても大丈夫だよ？）

玲は、あたふたしながらも観衆に声を掛ける。

「あの、皆さん、お騒がせ致しました。坊やの意識も無事戻りましたので、もう心配はございません」

しかし玲が其れと伝えても人々は、玲を食い入るように見つめたまま動こうとしない。

（なつなに？ どうして帰らないの？ ……そうか、心肺蘇生法なんてやったから、よっぽど皆の意表をついちゃったんだね でも困ったな、先を急ぐのに……ここは、突っ切って行くしかなさそうね）

そう考えると、玲は人垣に向かって歩を進めた。

「あの、すいません。使いの途中で先を急ぐので、通してください」言葉を告げながら玲が人垣に近寄ると、人垣は自然に二つに割れた。

玲は、すいません。ありがとうございます。などと、軽く会釈しながら、人々の注目を物ともせず人垣を抜けた。

暫くは人々の視線を感じたが、橋を渡りきり振り返ると、もう人垣も見えなくなっていた。

「ふう。びっくりした。いつの間にあんなに集まったわけ？ 全然気が付かなかった」

さてと。と玲は時間を確認すべく帯に入れてた時計を取り出す。すると、驚いたように声をあげた。

「うわぁ大変！ ずいぶん時間ロスしちゃった。急がなきゃ！」
と、玲は慌てて使い先へと、急ぎ足で向かった。

新たな日常 貳（後書き）

当方、医療関係者ではありません。

事前に下調べをしてから文章に起こしていますが、医療行為・知識に誤りがあると思います。

従って、作中に登場する医療に関する行為・知識は参考になりません。

上記の事をご理解の上でご覧下さいm（　　）m

* 四半刻^{しはんとき}……三十分

江戸時代では、一般に『四半刻』が時間を表す最小単位だったそうです。

新たな日常 参

あれから、休みなしで一時間以上歩き続けた玲は、疲れてクタクタになった姿で、地図を片手に辺りを見渡している。

汚れた着物は、泥が乾き始め、歩くとポロポロと土が地面に落ちる。

「此処かな？」

目の前の立派な門構えの屋敷を見上げる。

遅ればせながらも、ようやく義観に頼まれた使い先に着いたようだ。

「御免くださいーい」

門から声を掛けてみるが、何の反応も無い。土地が広大らしく、声が届いていないようだった。

(勝手に中に入っているのかな？ 不法侵入で怪しまれないかな？) 入るべきか、入らざるべきか、と悩んでいると、

「おまえさん、ウチに何か用かい？」と、背後から声を掛けられる。

玲が振り向くと、そこには、鳶色の紋付袴姿で腰に刀を帯びた義観と同年代位の男が立っていた。

「えっ？ あの、こちらのお屋敷の方ですか？」

「そうだぜ」

と答えると、玲が何者であるか見定めているのか、ジッと見てくる。

「失礼しました。私、寛永寺義観僧都の使いで参りました、柳崎

玲と申します」

と改めてお辞儀をして挨拶をする。

すると、男は笑って話してきた。

「そつかよ。俺は勝麟太郎だ。号は海舟。義観にや海舟と呼ばれてんな」

そのあまりにも著名な名は、玲を驚かせるには十分な威力だった。

玲が放心している間に、話がどんどん一方的に進んでいく。

「まず、着物を着替えさせてやってくれ」

「ええ、わかりました」そして、未だ放心状態の玲に民子は声を掛ける。

「？ あなた大丈夫？」

勝が振り返り玲を窺う。

その気配にハツとして、玲は顔を上げた。

「えっ？ あ。は、はい。だ、大丈夫ですから、お気になさらずに」と言つと玲は、慌てた様子で着物の袷から義観が認めた書状を取り出した。

「おじ上から、この書状をご主人に渡すようにと託っています」

玲は、勝に文を差し出す。

「はあ？ おじ上え？ おまえさん、義観の親類かなんかかい？」

と、勝は玲を見つめながらポカンとした様子で、文を受け取る。

勝のそんな反応に一瞬驚いた玲であったが、

「はあ、まあ……そんなようなものです」

と答えると、少し照れているような、はにかんだ笑みを浮かべた。

そんな玲の様子を、尚も呆然とした様子で見つめる勝。

「麟太郎さん、こんな所で失礼ですわ。お話は、上がって頂いてからして下さいな」

民子が、勝の様子に構わず話に割って入る。

そして、さあ、どうぞ。と玲に微笑みかけた。

「あつ。私、汚れているので上がるわけにはいきません」

お座敷を汚してしまいますので結構です。と玲が伝えた。しかし民子に、

「いいのいいの、気にしないで。休んでいって下さいな」

ささ、上がってくださいまし。と笑顔で返される。

「……それじゃ、ちよつと失礼いたします」

と継げた玲は、家上がるのかと思いきや体の向きを変え、玄関の外へと小走りが出ていってしまった。

玲の突飛な行動に勝と民子は、目を丸くして玲の後ろ姿を見送る。「あ？ なんだ？」

勝が意味が分からないといった風に呟く。

程無くすると、玲は庭先で立ち止まり自分の体を叩き始めた。

「ん？ ありや、何やってんだ？」

勝が怪訝そうに玲を眺める。

すると、式台にいる民子が、あつ。と小さな声を上げた。

そして、歪む口元を隠すように、そつと指先で押さえ、勝を見上げた。

「……隣太郎さん。あれはきつと、着物に付いた泥を叩き落しているんだわ」

と言うと、民子は可笑しくて、もう堪らないといった風に笑い始めた。

そつ、民子が述べた事はまさしく正解で、玲は、着物にこびり付いた乾いた泥を外で落としているのである。

それは、玲なりに、お座敷を汚さないようにと配慮しての行動だった。

民子から玲の行動の実態を聞いた勝は、しばらくポカンとしていたが、次第に可笑しくなってきたのか民子と一緒に笑い始めた。

しばらくすると、玲はまた小走りで玄関に戻ってきた。

玲は、自分の行動を一部始終見られていたのが恥ずかしいのか、少し頬を朱に染めて辞儀をした。

「それでは、お言葉に甘えてお邪魔致します」

「ふふふ。可愛らしいお客んだわ。どうぞ、上がってくださいまし」

「おう、遠慮すんなよ。上がれ上がれ」

と、未だ可笑しそうに笑みを浮かべる民子と勝に促され、玲は式台に上がる。

続いて勝も、草履を脱いで式台へと上がった。そして、

「おまえさん、着替え終わったら、俺の所にこいよ」
それだけ言うと、勝はくるりと踵を返し、奥に続く廊下を歩いて行ってしまった。

玲は、えっ？ と暫し、ぼうつと勝の後ろ姿を眺めていたが、

「あなたは、こっちよ。ついてきて」

と、民子に勝が歩いて行った方向とは逆の廊下へと急ぎ立てられ、慌てて玲は民子の後をついて行った。

お言葉に甘えて、着替えまでさせてもらった玲。

しかし、借りた着物は少し小さかったため、おはしよりを作らずに着た。

現代では其れほど身長の高い部類ではなかった玲だが、往々にして、この時代の女性は玲より若干低い。

ほんと、何から何までお世話になりっぱなしの玲は、只今は夕餉を頂いている。

着替えが終わって、勝の部屋に向かう頃には、外は薄暗くなり始めていた。

驚いた玲は、丁重にお礼を述べて帰路につこうとしたのだが、勝が夜の女のひとり歩きは危険だから泊まっていけ、と言ってきたのである。

しかし、義観が心配するからと断ると、飛脚を出したから大丈夫だと言うのだ。

その、勝の行動の速さに思わず関心するやら、強引さに呆れるやらで、玲は舌を巻いた。

そうして説き伏せられた玲は抵抗を諦めて、今日一日勝家に泊ま

る事にしたのである。

「それで、おまえさんはその子供を助けて泥まみれだったって訳かい？」

勝が、野菜の煮物を食べながら聞いてくる。

なぜ、あんな姿だったんだ。と勝に聞かれ、当初、渋って話そうとしなかった玲だが、余りにも勝がくどいので到頭観念して救出劇の顛末を話したのだ。

「はい」と玲は手に持っている椀を、膳に戻しながら小さくなる。

「しかし、死んだ人間が生き返るってえのはすげえな。そのシンパ イソセイホウってどんななんだい？」

（困ったな、この時代って心肺蘇生なんてないんだよね？ だから言いたくなかったのに……）

きつと、また自分が口を割るまで勝は聞いてくるだろう。と一つため息をつき、諦めて話すことにする。

「心肺蘇生法は意識障害、呼吸停止、心停止もしくはこれに近い状態に陥った患者の、呼吸および循環を補助し救「おい！ 待て待て！」「

玲が早口に説明していると、勝がストップを掛けてきた。

「おまえさん、俺が意味わかんねえの分かっててわざと言ってるだろ？ まあ、その通りなんだがよ。おまえさんも中々のつむじ曲がりだね」

と言うと、可笑しそうに盛大に笑い出した。そして、もっと分かりやすく説明してくれ。と言う。

玲も、少し意地悪が過ぎたかな？ と少しだけ反省して、もう一度説明をする。

「えーと、今回の場合、その坊やが川で溺れて、私が駆けつけ確認した時には、意識もなく呼吸が止まった状態でした。

そこで、気道の確保……気道とは呼吸の際に空気の通る道のことなんです、この場合鼻または口ですね。

その気道に、舌が喉に落ち込んだり、吐物などで、肺胞に達するまでの道を塞がないように空気の通り道を作る処置をします。ここま
でが第一段階です」

とそこまで話して、玲はお茶を飲んで喉を潤した。

「それで、次にmouth to mouth 鼻をつまみ口対口
で空気を送ります。これを、二回行います。このとき空気がきちん
と送られているかを胸の膨らみで確認します。

そして、自発呼吸が戻ったか、脈があるかを確認します。坊やの場
合は、残念ながらどちらともありませんでした。これが第二段階。

第三段階は、第二の後で自発呼吸・脈拍が確認できない場合のみ行
います。もちろん坊やにも行いました。

今度は直接心臓に刺激を与え働きかけます。手を重ね、胸骨圧迫を
反復することによって、血液を体に循環させようと促がします」

身振り手振りでジェスチャーを交えながら玲は説明をする。

「これを速い速度で三十回圧迫します。とにかく全てにおいて素
早く行動することが大切です。そして、また第二の口対口人工呼
吸、第三の胸骨圧迫を繰り返します。

坊やの場合……私も良く覚えてないのですが、五・六回繰り返した
頃に意識を取り戻してくれました。

運がよかつたんです。心臓が停止してから長く刻限が経過した
場合、心肺蘇生法は役に立ちません。

ですが、坊やは呼吸と心臓が停止してからの刻限が短かった。それ
と、今の季節が初冬で気温と溺れた川の水温が低かった。

体の温度が低下している場合、脳は呼吸が止まっても、より長い時
間生存してくれます。直ちに蘇生法を行えば助かる確率が高くな
るんです。

そして、私が偶然その場において、直ぐに処置を行えた」

ほんと、運がよかつたんです。ともう一度最後に言っ
て締めくくった。

玲の話を黙って聞いていた勝は、腕を組み何か考えているかの

ような様子。

玲は、止まっていた食事に戻ろうと、箸を手に取り、ぬるくなつた味噌汁をのむ。

「おまえさんは、医師なのか？」

暫く玲の食事をする光景を眺めていた勝が口を開いた。

玲は、口に入っていたものを飲み下すと、

「いえ、祖父と兄が医師だったので一般の人よりは知識がある程度です」

あと、自分で独学で勉強はしてましたけど。と、胸中で呟く。

「おまえさん、いま家人は？」

『くだつた』と言うニュアンスに勝が何か感じたようだ。

「……ありません。ですので今は、おじ上の所でお世話になってい
るんです」

それを聞いた勝は、少しばつが悪そうに、

「そうか。余計なこと聞いちまったな」

「いえ、大丈夫です。御門主様も宮様も、もちろんおじ上も、皆良
くしてくれるんです。感謝してもしきれません」

「そうかよ。 んで？ おまえさんは、医師になる気はねえのか
い？ それだけの知識があんだ、もつたいねえだろ」

（そんなの無理よ。いくら知識があるっていつても、それは現代医
学であつて、この時代の医療知識じゃない。 医者なんて、到底
無理よ……）

「私の知識なんて大した事ありません。それに、勉学するにも私に
は金子がありませんから」

ささ、折角の御飯が冷たくなってしましますよ、頂きましたよ。

と、その話を避けるかのように断ち切り、玲は煮物を頬張つた。

そんな玲を見て勝は、もつたいねえなあ。 と、一つ零したが

玲に倣い再び食事に戻つた。

新たな日常 参（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

やっと新たな人物が登場しました。

話の流れがゆっくりで申し訳ないです。

とりあえず、新たな日常の章はこんな感じで、ゆっくりじっくり進みます。

とか言つて、他の章もこんな感じかもしれませんが……それはスキルの問題でしょうね（――、（ ヽアイヤアヽ
……頑張りますっ。

当方、医療関係者ではありません。

事前に下調べをしてから文章に起こしていますが、医療行為・知識に誤りがあると思います。

従つて、作中に登場する医療に関する行為・知識は参考になりません。

上記の事をご理解の上で「閲覧下さい」

新たな日常 肆

食後、お風呂を頂いた玲。

実は彼女、こちらの時代に来て約一週間が経つが、お風呂に入っただのは今回が初めて。

それというのも、玲の住んでいる家には風呂が無い。

寺の僧坊には、僧達の使う風呂があるのだが、誰も使用していない時間に使うといっても、流石に此れは厳しいと判断し入らないでいたのだ。

仕方がないのでここ一週間は、湯を沸かし大きな桶に注ぎ入れ、髪や体を住処となった家で洗っていた。

しかし最近では、この世にも慣れ始めた事もあり、義観に頼んで銭湯にでも行かせてもらおうかと思っていた所だった。

「……池の水には、灰色のみにくいアヒルの姿ではなく、真っ白な美しい鳥が映っていました。

『ぼくはみにくいアヒルの子なんかじゃない。あの美しい鳥たちと仲間だったんだ』と若い白鳥は、心から喜び大きく綺麗な羽を広げました。おしまい」

お風呂に入り気分の良い玲は、勝家の子供達の子守に買って出、今はアンデルセンの玲の大好きな童話を聞かせていた。

「ねーちゃん。じゃ、みにくいアヒルの子は、みにくくなんてなかつたんだね！」

勝家嫡男の小鹿が、瞳を潤ませて聞いてくる。

「そつだよ。みにくくなんてないんだよ」

玲が微笑みながら告げると、「よかったあ」と、小鹿と次女の孝子が互いに顔を合わせ笑顔を浮かべあった。

「みにくいアヒルの子は、自分が劣っているのだと思っていたけど、

そうじゃなくて、本当の自分の姿を知らなかっただけなの。みんなと違うために、意地悪されたり疎まれたりしたけど、本当の姿は美しい白鳥だったよね。小鹿くんもお孝ちゃんも、もしこれから、みにくいアヒルの子のように出来ない事があつたりしても、人と比べたり、自分が劣っているなんて思わないこと。いい？ まず、自分出来ることを少しづつ見つけていけばいいし、それに人は皆それぞれその人が持つ個性と才能が秘められているの。十人十色っていうでしょ？ それがきつと、自分を美しい白鳥に変えてくれるから自分を信じて前を向いていけばいいのよ」

と、玲は話して最後にニツコリと微笑む。

「うん！ わかった！」

再び、小鹿と孝子が元気良くハモって返事をした。

（ちよつと、この子達には難しかったかな？ でも、まっいつか。大きくなつて、昔こんな話聞いたなあ位に覚えててくれたら、それでいい）

「ねーねー、玲おねえちゃん！ もつと何か話してー」

「うん！ オレも聞きたい！」

「そうだね、じゃ今度は何がいいかな？」

と玲が考え始めた時。

襖が開いて、勝が姿を現した。

「小鹿、お孝、もう寝る刻限だぞ。そろそろ終いだ」

「え〜！」

「父上え、もう少しだけダメですか？」

「今日はもう遅い、また今度聞けばいいだろう」

抵抗も虚しく、あっさり却下された小鹿とお孝は、ふて腐れながらも立ち上がる。

「ねーちゃん、またお話聞かせてね」

「うん、いいよ。小鹿くん、お孝ちゃん、おやすみ」

「おやすみなさい」

二人が、勝の横を通って座敷を出て行く。

その姿を見送っていた玲。すると、

「おまえさん、少し、酒に付き合わねえか？」

「えっ？ 私、お酒なんて飲めませんよ」

「だろうと思つてな、甘酒も用意してある。来な」

そう言つて勝は座敷を出て行く。

(……強引だなあ……)

例の如く強引な勝に苦笑いをしながら玲は付いていった。

座敷には、膳が二つあり簡単なつまみまで用意されていた。

膳についた勝がさっそく手酌で酒を呑もうとしている。

「あつ、私やります」

「ああ、いい。気にすんな」

と言うと、勝は注いだ酒をぐいっと呑み干した。

そして、猪口を膳に置くと勝は玲を見据えた。

「おまえさんは、色んな事知ってるんだな。さつき小鹿らにした話もそうだが、おまえさんメリケン語も話せんのかい？」

(メリケン語？ ……なんでいきなりそんな話題になる訳？)

勝がなぜそんな事を言い出したのか解らないといった風に勝を見る。すると、

「おまえさん、川に落ちた坊主の話してる時しゃべってたじゃねえか」

「え？」

玲は吃驚して、思わず息を止めた。

勝が言う『川に落ちた坊主の話してる時』とは、心肺蘇生法の説明をしている時の、玲も気付かぬ内に口から出ていた『mouth to mouth』と言う言葉を指していた。

(……話したかも。でも、よく気付いたわね。さすが勝海舟、ちよつと口を滑らしたのも聞き逃さないって訳ね。

どうしたら……嘘が通用するようにも思えないし……あつ、たしか勝海舟って蘭学を学んでいたはずだよな？ だったら、たとえ私

が英語を学んでいると言つても勝さんなら大丈夫かも……)

「で、どうなんだい？」

誤魔化しきれないと判断した玲は事実を話すことにする。

「ええ。学んできましたので多少は……」

勝は、酒を注ごうとしていた手を止めて玲を見た。

その表情はどこか楽しんでいるようで口角が上がっている。

「こりゃ、まさかとは思つたが驚いたな。開国して以来、英学の習得は急がれるようになったがよ、まさかおなごのおまえさんが英学を学んでるとはねえ」

「あははは……まあそうですね、これからは外交、貿易などの日本国防の手段として英学の習得は急務ですものね。あははは……」
空笑いをしながら、その場しのぎの何気ない返事を返したつもり
の玲であったが、その玲の返答に勝は微かに目を見開いた。

その表情は先程までとは異なり、驚愕を孕んだ表情の中にも何か
思案巡らせているかのような真剣な顔。

女だてらに勉学に英学を学んでいるだけでも寝耳に水であるのに
対し更には、開国してまだ数年、一般には藩が社会の単位で、国と
いえば藩的な規模を指す事が多い中で、玲の中にはすでに国家とい
う概念がある事がわかる発言、そればかりか外交やら貿易などとい
つた言葉。

今現在の幕府、否、日本の現状を理解していないと出てこない発
言である。

玲の短い返事から、勝は鋭く玲のその高い知識を見抜く。

玲を見ると、玲は銚子に手を伸ばし気品を漂わせる上品な仕草で
湯呑みに甘酒を注いでいる。

その仕草は、洗練されたもので見目の美しさも見合つて、一見ど
こぞの姫君にさえ見える。

しかし、その容姿もさることながら、非常に頭が切れる事が窺え
る発言。

祖父と兄が医師であったと玲は言った、更に義親は縁続きの者と。勝は、なるほど頭が切れるはずだ。と独り納得する。

まだ出会って僅かだが、この数時間で驚かされてばかりである勝は、実に面白い、興味が尽きない。と心底思っていた。

勝は止めていた手を再び伸ばし自分の杯に酒を満たす。そして杯を一気に仰ぐと口を開いた。

「おまえさんは、英学を学んでたって事は開国を望んでんのかい？今の幕府をどう思う？」

勝自身は玲が英語を学んでいた事について驚きはしたが抵抗は無い。むしろ、関心した。というのが本心だ。

しかし、そんな事より今は、玲のこの国に対する考えが聞きたくなつたのだ。

英学を良いきっかけに玲の本心を導きだそうと勝は問う。

玲は湯呑みを膳に置き、勝を見た。

「私が英学を学んでいたのは、別に政や思想などとは関係ありませんよ」

もちろん玲はこの時代の人間ではないため義務教育でいまままで学んでいただけの事である。

開国・攘夷、ましてや後に出来る思想、佐幕派・倒幕派の対立などというのは過去の出来事で、これまで自分が過ごしていた平成の世では関係のなかったことである。

（たしか勝海舟は開国派の急先鋒だったんだよね。

それに私の記憶が確かなら勝さんの妹の旦那さんって、開国論者の佐久間象山だったはず。

それなら私の思っている事、まんま話しても危険はなさそうね）
「そうですね……開国については、こう言っただけは言葉が悪いですけど仕方のない事だと思いますよ」

授業や小説等で知った歴史の知識を思い出し、自分なりに考えていた結論を述べた。

「そうか。じゃーよ、おまえさんはなんでそんな風に思っっているんだ？」

杯を傾けながら勝はなお、問い掛ける。

（あまりこういう話はしたくないんだけどなあ……でも、勝さんも知っている事だろうし大丈夫かな？

それにどうせ私が話すまで、勝さん諦めてくれないだろうし？）

玲の家には、歴史好きの祖父と兄達を買った小説や資料、時代劇のビデオやDVDが大量にあった。

その影響で、小さい頃から家でひとりで過ごす事の多かった玲は暇を持て余した時などに、よくビデオを観賞したり本を読んだりしていたものだ。

そのおかげといったところか、玲は小さな頃から歴史が得意分野であった。

玲は、いつか読んだ資料を思い出し、少し考えてから話しはじめた。

「欧米諸国が産業革命を経た今、資源と市場を求めての諸国の進出が活発化しています。それは、アヘン戦争による清国、セポイの乱による印度の惨状をみれば分かる事です。勝さんもご存知だと思いますが、今ではどちらの国も植民地化が進んでいますよね。そして今、この日本が危機に瀕している。ですが、攘夷を急ぎ今、諸外国と戦になれば確実に日本もこれらの国の二の舞となり植民地化されざるを得なくなります。それは、ただ開国を拒否した場合でも同じ事です。アメ、いえメリケンと戦をしても長らく鎖国していた日本国と欧米諸国では、なにより武力の差が大きい。残念ながら今の日本が勝てるとは思えません」

甘酒の入った杯を傾け喉を潤おす。

そして更に玲の言葉は続く。

「先ほども申しましたが、開国を拒否し続ければ清国のような英・仏・露による分割植民地化は避けられない。となると、開国の方針をとらなければ将来、国を維持することはできないでしょう。その

点で、先を見据えられた策として大老の決断は英断だったと私は確信しています。日本が独立を維持するには、開国して積極的に貿易をし、国力を上げなければならぬ。今、日本にとって最善の政策は国交を結ぶ事。その上で富国強兵を進め欧米と再交渉するなり攘夷をすればいいのではないのでしょうか？ 色々問題はありますが、今は無駄な流血と植民地化を避けるための手段としてそれ以外ありません。それが正しいかどうかは判りませんが……私は、幕府は間違っていないかと思っと思っています」

それまで静かに玲の言に耳を傾けていた勝は、その通りだ。と言わんばかりに深く頷き言葉を述べる。

「そうだ。戦をおっぱじめても勝ち目なんかありやしねえ。おまえさんの言う通りまずは富国強兵が先だ」

少しの間の後、しかし と勝の言葉は続いた。

「頭のかてえ血の気の多い馬鹿野郎ばつかで頭が痛えや」

それは、誰に聞かせるでもなく独り言のような響き。

その言葉が耳に入った玲は、何か考えを巡らせているかのように沈黙する。

程無くして、玲は神妙な面持ちで口を開いた。

「聞いて頂きたい事があるのですが……」

勝がなんだ？ といった態度で玲を見る。

「私が言うのも差出がましいと思うのですが……井伊大老の事です。大老のほぼ独断による米国との条約締結と強行に押し進めた開国、さらには大老の強圧的な政策。攘夷派にとって井伊大老は憎悪の対象となっているとは思いませんか？」

万延元年、桃の節句の三月三日。

大老井伊直弼は登城途中の江戸城外桜田門付近で水戸藩浪士により襲撃をつけることとなる。

それは、今から半年も経たぬ内に起こる。のちに言う《桜田門外

の変』である。

桜田門外の変による暗殺は、白昼、江戸城門外で幕閣最高責任者が殺害されるという最悪のシナリオで、幕府は井伊の強権的な手腕で回復しかけていた権威が一気に凋落することになる。

更に、この事変により『倒幕』という明確な目的が攘夷派の中に形成され始め、反幕派による尊皇攘夷運動が激化する端緒となり、徳川幕府滅亡の遠因ともなつてゆく。

玲は、井伊が桜田門外の変で暗殺されなければ、この先の、日本人が日本人を浄化するといった醜く残酷な戦いが防げるのではないかと考えた。

未然に防ぐ事で、沢山の死者を出す戦を避けられれば、と思いつたのである。

ただ純粹に、この先に待ち受ける悲しく惨い出来事を避けるために……。

「……まあ、そりやそうだろうな。なんだ？ 大老が襲撃されるとでも思ってたのか？」

そう言つと、勝はおもむろに立上がり、傍にあつた木製の箱火鉢のもとに移動し、隅に突き刺してあつた火箸を手に取り、火を強く起こすべく火鉢の中に炭を足した。

「でもよ、そりやねえだろ。近江彦根藩の藩主でありながら大老だぞ。そんな事が起これば世の中の天地がひっくり返っちゃうわぁ」

「では仮に、そのまさかが起こつたらこの国はどうなってしまうのでしょうか？」

玲は息を呑んで、火鉢をいじる勝の背中を見つめる。すると一言。

「内乱が起こる」

と力強く、けれどももひつそりと響く音色をもって述べた。

(さすが勝海舟……鋭い勘働き。いや、瞬時に先を見抜く力が勝さんにはあるのかもしれない)

確かに先見の明を有しているだろう勝の鋭い感性に、玲は慄きつつも敬意の念を抱く。

「私も同様に考えております。だからこそ、大老には気を付けて頂きたいのです」

「気を付けるつつあって、相手は殿様だぞ？ どうやって襲うって云うんだ？ 攘夷の奴らが狙ったところで、そう易々と手出しはできねえよ」

勝は、途方も無い事を言い始めた玲の言に呆れたかの様に火鉢の中の炭を火箸で弄び始めた。

「ところで勝さん？ 雨や雪の日に外出する時は刀に袋をかぶせると聞いたのですが、それは本当ですか？」

突然、脈絡のない質問をする玲。

勝は少し怪訝な表情を浮かべながら答える。

「なんだ？ いきなりだな。まあ、そうだな……水が浸入して刀が錆びねえように柄袋付けん。あとは、鞘に油紙巻いたりな」

それがどうした？ といった表情で玲を窺う勝。

「突然おかしな質問をして、すいません。……ついでに、もう一つだけ良いですか？」

「なんだ？」

「はい。先ほど勝さんが言った井伊大老をどのように襲うかですが、確かに一介の浪士が大老を狙うとなるとなかなか機会はありませぬ。ですが唯一、大老と接触できる好機があるとは思いませんか？」

二人の間に、束の間の沈黙が下りる。

やがて、沈黙を破ったのは勝だった。

「登城と下城か」

勝が弄火^{もろうか}していた火鉢の中の炭がパチパチと音をたてて火の粉を散らした。

「はい」

玲は勝の目をジツと見つめたまま、ゆっくり頷いた。そして、言葉は続く。

「更に申しまゝ更に言えば、襲撃する時、雨が雪だったら従者がすぐに刀を抜く事ができねえ、襲撃する側としちゃ、これほどの絶好の機会はありませんねえ。　だろ？」

玲が更なる口上を述べようとしたら、勝が言葉を被せてきた。

しかもそれは今まさに、玲が述べようとしていた事。

井伊直弼暗殺の当日、その日は季節外れの雪で視界も悪く、井伊家の家臣たちは雨合羽を羽織り、更には刀の柄がぬれないようにと袋をかけていたので咄嗟の応戦ができなかったと聞く。

そのため襲撃側には有利な状況で、ことのほか容易く暗殺が実行されたのである。

「い、ご名答です」

玲は、鳩が豆鉄砲を食らったような表情を浮かべて言った。

その様子を見た勝が笑う。

「なあに、驚れえてんだ。おまえさんが言おうとしてた事じゃねえか」

「え、ええ」

「大老の身が危ねえってのは分かった。んで、何でおまえさんはそんな事を言うんだ？」

玲は、物寂しそうな表情をして微笑みを浮かべる。

「ただ、生きてほしいから。」

大老も、沢山の人々も。……人の

命は尊いものです。ですが、それと同時にこれほど脆いものもない

……」

病気を患い、長い間病床に臥していた母を玲は思い出す。

余命僅かと宣告されてもなお、投薬も止めず最後の時まで病と闘っていた母。

だがしかし、無常にも母は治療の甲斐なく儂く逝ってしまった。

玲は、一番身近な存在の母により、死を学ぶ事となった。

まだ幼かった玲には、酷すぎるほどの経験でもあり、また、命の大切さと儂さを知る貴重な経験でもあった。

「だからこそ、無駄に命を失って欲しくないのです」

玲の小さな肩がかすかに震え、膝の上に置いた両手には力が入り白くなっていった。

「……なるほどな。おまえさんのように、医道の心得が有るような人間にや、尚更かもな。まあよ、事の次第は俺が直接大老に託ける事は出来ねえが、近い者に伝える事ぐれえなら出来っからよ」

だからそんなに心配しなさんな。と言って笑う。

ふいに立ち上がった勝は膳のもとへと戻り、酒の肴をつまむと、おいしそうに杯を仰いだ。

そんな勝を見て落ち着いたのか、玲の強張っていた体から力が自然と抜けていく。

「くれぐれも気を付ける様にと、宜しくお願いしますね」

「おう。で、俺からも言いてえ事があんだけどよ、おまえさんはさつき命は尊いものだから無駄に失って欲しくねえと言ったな。やっぱよ、そういう奴こそ医師になるべきなんじゃねえか？」

その勝の言を聞いた玲は、途端に黙り込んでしまう。

その表情は先程までとは違い、まるで感情を押し殺しているかのように表情が無い。

勝が更に言葉を続ける。

「おまえさんは、自分の知識は大したもんじゃねえって言ったがよ、俺は、そんな風には思えねえな。むしろ、おまえさんの医学の知識はそこらのへタな町医より優れてると思うんだがな」

シンとした室内だからだろうか、勝が酒を杯に注いでいる音が、やけに響く。

「……そんな事ありません……勝さんは私を買い被りすぎですよ」「金子の心配はいらねえと思うぞ。なんなら俺から義親に掛け合つて「やめてください！ いいんです！ 私、医師になるつもりはありませんから」

玲は我知らず強い口調で、勝の言葉に割りこんでしまっていた。

平成の世から時を越えて此方の世へ来た時、玲は医師になる夢を諦めた。

もしそうで無くとも、十分過ぎるほどに世話になっている義親にこれ以上甘える訳にはいかない。

医学を学ぶための費用を無心するなど以ての外だ。今は、少しでも早く自立をし迷惑を掛けないように、一人前にこの時代で生きていけるようにならなくてはいけない。と、玲は考えている。

「すみません。本当に私には無理ですから……」
そう言うつと、視線を膳に落とし箸を手取る。

頭の前で、勝が小さくため息を吐いたのが聞こえた。

「そ」か。じゃ、もう言わねえよ。ただ最後に、これだけは言わせてくれ。 おまえさん小鹿とお孝に話を聞かせてただろ、みにくいアヒルだかなんとか言ってたな。あれ、おまえさんにも当てはまるんじゃないのか？ おまえさんは自分が劣っていると思つてっけど、そうじゃねえ、自分を知らねえだけだ。 否、違うな。 おまえさんは白鳥になる準備は出来てるのに、なるうとしねえだけなんじゃねえのか？ 人にはそれぞれその人間が持つ個性と才能が秘められてんだろ？ おまえさんの個性と才能はなんだ？ 自分で分かつてるはずだ。違うかえ？」

「……ご忠告は有り難く受け止めさせていただきます。 ですが、先ほども申しましたとおり、私は医師になるつもりはありません」

玲の表情は依然として無表情であるが、凜とした眼差しは健在で、その真つ直ぐな視線を勝に向け意思が変わらぬことを伝えた。

その玲の意思の強そうな瞳を見て勝は　こりゃ、義観の縁の者に違いねえ。頭が固くて俺にゃ手に負えねえな。と胸中で呟き、自分の友人である義観を思い出す。

普段温和である義観もまた、玲同様、頑固で融通のきかない所がある。

しかしそれは、一本筋の通った芯の強さと、それと表裏を為す心の優しさを持ち合わせている人物である事から起因する。

玲を見ているとそんな義観と重なる。

そして、義観に似通っている玲だからこそ、頑なに医道を拒むのにも、また何か訳があるのだろうと勝は思う。

外見は、まったく言っていていいほど似ていないが、中身は自分の友人にそっくりであると、しみじみ思いながら改めて玲を窺っていると、勝はなぜだか無性に可笑しくなってきた笑いを始めた。

玲はいきなり笑い出した勝を怪訝そうな表情で眺める。

その様子に気付いた勝が、笑みを浮かべながら言葉を継いだ。

「悪かったな。おまえさんにも何か考えがあるんだろうからな。もう言わねえよ」

玲はそう述べた勝を、本当にもう何も言わないか？　と疑っているように不審げに勝を見つめる。

「なんだ？」

勝は、未だ笑みを浮かべながら問う。

玲は一つ小さく息を吐き、我知らず入っていた肩の力を抜く。そして、

「いいえ」と述べ続けて、

「私の方こそ、勝さんは私のために言っておさったのに失礼な態度をとってしまったして申し訳ありませんでした」と辞儀をした。

「あゝいい、いい！　んな事、気にすんな　それより、甘酒まだ残ってるのか？　持ってこさせるか」

言いが早いのか、勝は勝家に仕える小間使いを呼ぶために立ち上がった。

「あつ！ もう結構ですよ！」

そんな勝の言葉と行動を見た玲は、もうこれ以上つき合わされるのは勘弁だ。とでも言いたげに慌てて止めの声を上げる。

すっかり勝のペースに乗せられている玲は、勝に引つ掻き回され、今日出会ったばかりなのに彼此あれこれと話し過ぎである。それに正直なところ、勝の質問は際どいものばかりであるため、襷褌を出さないようにと注意しながら受け答えるのが非常に疲れるのである。

「勝さん……まだお呑みになるのですか？」

玲は、自分の解放を願いつつも言葉を紡ぐ。

しかし玲の願いも虚しく勝は、

「なあに言つてやがんだ。俺はまだ、大して呑んじやいねえ。もう少し付き合えや」

とニヤリと笑みを浮かべて言う。

そんな勝に、玲は二の句が継げず、引き攣った表情で苦笑いするのみ。

玲にとっては正しく、一難去つてまた一難。否、二難三難去つてまた一難だろうか。

こうして玲にとって長い長い夜は更けて行くようだった。

新たな日常 伍

義観の使いで勝家へと行った、あの日から数週間。

すっかり秋の装いは去り、風景は冬独特の寂しさを感じさせるものへと様替わりしていた。

此处、寛永寺も秋には紅葉観賞に来ていた人々で賑わいをみせていたが、今は静寂の時間が訪れている。

全ての仕事を終え暇のできた玲は、寛永寺の寺領にある不忍池しのはずのいけまで散歩に来ていた。

江戸の町の賑わいから遠ざかった、その静かな景勝地は、訪れる者すべてに癒しを与えてくれる。

しかし、その景色を見つめる玲の瞳に覇気は無く、いつもの凜とした輝きも無い。

心此处にあらざといった様子で、何処を見ても無くただ辺りを、ぼつと眺めている。

暫くそうしていると

「玲さん！」

背後から自分の名を呼ぶ声が耳に入る。

玲はゆるゆると振り返ると、辺りを見渡す。

すると、寺の方へと通じる階段を駆け下りてくる明心の姿が視界に映った。

「……明心さん？」

「不忍池に居たのですね。ずいぶん探しちゃいましたよ」

明心は玲に駆け寄ると、少し息を弾ませながらそう述べた。

「いったい、どうしたのですか？」

「和尚が呼びびです。寺にお戻りになってください」

突然の呼び出しに、玲は疑問を抱くが、明心はニコニコと微笑む

だけで呼び出しの理由までは答えてくれなかった。

そうして、自分を探しに来た明心と共に義観のもとへと赴くと、

「玲の人別簿を作ろうと思う」

義観が開口一番にそう述べた。

「人別簿？　ですか？」

玲は首を傾げながら返事を返す。

すると、義観は玲が人別簿が何であるか理解していないと察し、詳しく説明をしてくれる。

人別簿とは、現代で言う戸籍・住民票の身元を証明する物であるが、玲の場合この時代の人間ではないため、当然そんなものは無く必然とその戸籍の無い玲はこれまで無宿者になってしまっていた。

無宿者とは、浮浪者、親から勘当された者（勘当の場合、久離とも言う）、罪を犯して人別簿から名前を外された者などであるが、これではおちおち安心して生活が出来ない。それどころか最悪の場合、町奉行所に捕らえられる羽目となる。

そんな諸問題も有り、人別簿はこの時代で暮らしていく上で必要不可欠で重要なものであった。

「人別簿が無いのは色々都合が悪いからな。そろそろ玲の人別簿を作ろうと思う」

しかし、手前勝手に作るわけには、いかんからな。おぬしと、よくよく話し合わなくてはならん。と義観が述べた。

「……おじ上？　そんな重要なものを勝手に作成して大丈夫なのですか？」

私、このままでも構いません。私のためにご無理はなさらないでください。と玲は心配そうに述べる。

「確かに本来はしては成らん事ではある。しかし、この世の人間ではないのだ。人別簿がないのは不可抗力。であれば、作るしかなかろう」

「でも……」

義観にまた迷惑を掛けることになると考え、玲は返事を濁す。そんな様子を見て玲の心配をすぐさま感じ取った義観は、

「おぬしが罪人じゃというのなら話は別だが、玲、おぬし罪人ではなかるう？」

と、玲をからかう調子で笑みを浮かべて問うた。

すると案の定、驚いた表情になった玲は、

「お、おじ上、何をおっしゃってるんです！ 滅多な事を言うものじゃありませんよ。私は罪人なんかではありません！」

と語気を強めて慌てて否定してきた。

「ははは。だろう？ 罪人でもなければ異人でもない。歴とした大和の人間なのだ。だから人別簿を作るのも何も心配はいらん」
人より作る時期が少し遅れてしまったとも思っておけばよい。
と義観が微笑む。

障子の傍に座り話を聞いていた明心も微笑んで頷く。

そんな義観と明心の態度に、玲は困ったように曖昧に微笑む。

「ですがやはり、そんな重要なものを勝手に作るのは……おじ上にもしもの事があつたら私……」

「おぬし、本当に何も知らんのだな」と言うとき小さな声で、まあ仕方ないかの。と呟き義観は更に言葉を続けた。

「おぬしの世ではどうだったか解らんが、この世での人別簿のしきりは寺でしとるんだぞ」

だから、わたしの心配なら無用だ。云わば管理主がわたしたち寺のもんだからな　と述べた。

そうなのである。義観が述べた通り、人別簿の作成・管理は、主に寺院でしている。

更に詳しく説明すると、五人組頭（五人組：領主が町村に作らせた隣保組織。農村、都市における相互監視制度。五戸前後で一組設置）、地主、家主などでも人別簿管理をしている。

玲は、驚きで目を睨りながら声を発した。

「そ、そんなのですか!？」

「うむ」

義観が頷く。そして、

「だから、本来ならしては成らんが此度の件は不可抗力の事ゆえ、わたしが責任を持って玲の後見になることで人別簿を作ろうと思つ」

しかし、宗旨や菩提寺、居所、世帯関係をわたしの勝手に作る訳にはいかんからな、その辺を玲と話合わなければ成らん　と述べる。

「……………」

ぼかんとした表情で玲は義観を見つめる。

「なんて顔をしておる。話はわかったか？」

「……え、ええ」

玲は、こくりこくりと頷きながら答えた。

そうして納得した玲と義観が人別簿を作成するにあたって大切な話し合いをし始めた、その頃。

一人の男が、此処寛永寺にいる親友に会うため、親友の居るであろう院へと向かっていた。

「いや、しかし。此処はいつ来ても広いな」

寺人中、歩くだけでも一苦労だぜ　と、ぼやきながらその男は歩いている。

このべらんめえ口調。そう、勝海舟である。

安政六年　十一月。

幕府は日米修好通商条約批准交換のため使節をアメリカ派遣に決定した。

その使節の随行艦咸臨丸の指揮として乗船する事になった勝は、

しばらく会う事が出来なくなるであろう親友に渡米の報告をするため義観のもとへと訪れたのであった。

「せっかく来たからな、参拝してくか」

と考えた勝は、義観のもとへ行く前に御本尊の納められた根本中堂へ向かって行った。

「おじ上、本当に何から何まで有り難う御座います」

と玲は深々と辞儀をした。

話し合いの末、玲の細かな事柄が決まったのだ。

宗旨は、天台宗。これは玲が寛永寺にお世話になっているから決まったのでもなく偶然にも元々玲の家の宗旨が天台宗であったからである。

となれば菩提寺は、此処寛永寺でよかろうとの義観の勧めで玲の菩提寺は寛永寺となった。

世帯関係が一番の難問であったが、義観は前以って用意しておいた家督相続人が無くもう何十年も廃絶家となっていた戸籍を柳崎と改名して玲にあてがい再興させた。

そしてその後見人に義観が納まった。

これにより玲に何か問題が起きた時には義観が親代わりに動くことになる。

「本当に感謝を申し上げます」

「いいのだよ。これで玲も立派なこの世の人間だ」

何かしたい事がみつかった時には好きなように生きてほしい。

と微笑んで義観が話す。

「玲さんは何かしたい事は見つかりましたか？」

それまで黙って見守っていた明心が口を開いた。

玲は、その質問の返事に窮する。

「……………いい、いえ。まだ何も……………」

「そうですね。でも焦らずとも自然に見つかりますからね、これからです」

と明心が笑う。そして、

「さて、和尚もお茶が欲しくなった頃でしょうか？　一服いたしましようか、茶を入れてきます」

と明心が立ち上がるうとした時、障子の向こうから控えめに義観を呼ぶ声が聞こえてきた。

玲の身に関わる内密な話し合いのためこれまで人払いをしていたのだが、それを無視した訪問に義観と明心が険しい表情をする。

義観の代わりに明心が廊下に用件を聞きに出た。

すると、程無くして明心は呆れ顔をして座敷に戻ってきた。

「どうしたのだ明心？」

「ええ、海舟殿ですよ和尚。海舟殿が和尚にどうしても会いたいと来ているようです」

今日は忙しいからと断ったそうですが、会うまで帰らん。と言っている様で勝手に座敷に居座っていると　と呆れた表情で述べる。

「海舟か……あやつは毎度毎度」と何時も突然訪問してくる勝のため息をつきながら義観は言う。

「まあ、話し合いも終わったし、よかろう。連れてくるように言ってくれ」

「わかりました。では、私はお茶を用意してまいります」

と言いながら明心は人別簿を木箱にしっかり納め、それを手に部屋を出て行った。

「それでは、私はお邪魔でしょうから失礼いたしますね」

と玲が述べる。しかし義観は気にしていない様に、

「ん？　別におつても構わんぞ。それに玲を気に入っていた様子やからな、奴が喜ぶであろう」

と述べる。

しかし、そうは言われても、玲の方が勝にあまり会いたくないのである。

散々振り回されたあの日以来、勝に対し苦手意識が芽生えてしまった玲。

ズバズバと、それも鋭い物言いに、今度は何を言われるのだろうかと考えただけで慄いてしまう。

さっさと退散したいというのが玲の本音である。

「ですが、おじ上も勝さんと会うのは久方ぶりでしょうから、やはり私は……」

と、立ち上がろうとしたとき、徐ろに障子が大きく開いた。

「おお、おお。おまえさんも此処にいたのか。久しぶりだな」と、笑いながら入ってきた勝。

勝を案内してきたであろう僧などは勝に後ろに追いやられたのか、後ろで申し訳なさそうに身を小さくしている。

それを見た義観は僧に、労をねぎらうように深く頷くと「ありがとう。もうよい」と言葉を掛けた。

その僧が障子を閉めて去っていくと、義観は途端に呆れた表情でため息をついた。

玲などは先ほどから目を点にして固まってしまっている。

「海舟、人の訪ね方というものがあるであろう。どうしてこう、何時も何時も行き成りなんだ」

こっちも暇ではないんだぞ。と苦言を呈しながら胡坐をかいて座る勝を見る。

しかし返ってきた勝の反応は、何の反省の色もなく。

「いやな、近くまで来たからな、話す事もあるし今日が丁度よかつたんだわ」

と笑う。

そんな勝に一層大きなため息を一つ零すと義観は口を開いた。

「で、なんなのだ？ 話というのは」

「ああ。幕府の命だよ。俺、メリケンに渡航することになったんだわ」

と先程までの様子とは、がらっと変わり堅い表情で勝は告げた。

それを聞いた玲は、ハツとする。

義観と勝が話しているのを横目に玲は歴史の記憶に思いを馳せる。

(たしか、勝さんは条約批准書の交換のためにアメリカに行く使節一行の随行艦の指揮官なのよね……なるほど、これから行くのね)

「そうか。メリケンに……長い旅になりそうだな」

長く厳しい航海を思っただけ心配そうに義観が述べる。

「……ああ」

重い沈黙が座敷を支配する。

(そうよね。友達なんだもの心配よね……でもおじ上。大丈夫だよ。勝さんは事故も遭難もなく元気に日本に帰ってくるからね)

と胸中で思いながら義観をみつめる。

すると視線に気付いた義観が玲を見た。

玲は柔らかく微笑んでゆつくりと頷く。

それを見て玲が何を言いたいのか察した義観は一瞬驚いた表情をしたが、直ぐに明るい笑顔を浮かべた。

そして義観は、勝を励ますかのように強い口調で言葉を述べた。

「海舟よ。心配無用だ。おまえさんなら大丈夫。しっかり責務を

果たしてこい」

「……おう。そうだな」

と勝は言うが、やはり心配は拭えないのか何時ものキレがない。

「心配か？ だったららおぬし、浦賀の耀真山永神寺に行ってみるといい。あそこは海神が祭られておる」

航海の守護神の加護を祈念してきてはどうか？ と述べる。

「そうだな……俺もまだまだだな。渡航まで日がある。心身の鍛錬のため修行に行ってみるか」

修行は、久しぶりだ と勝が笑う。

「勝さんが修行するんですか？」

勝が修行とは少し、柄では無い様な気がして玲が思わず問うてし

まう。すると、

「おめえさんよ、人間完璧な奴なんかいやしねえんだ」

俺だつて信仰心くれえある。 と勝が言う。

実はこの男、こつ見えても信仰に厚く若い頃に禅の修業をしたほどであつた。

その修行時代に出会つたのが今、友人である義観であつた。

「そうですね。完璧な人間なんていませんもんね」と述べる
と玲は指先を畳に付けた。

「勝さん。勝さんの益々のご発展と、御武運長久をお祈りしております。無事なご帰還、心待ちにしております」

と、玲は深く辞儀をした。
そして頭を上げるとニツコリ微笑み、付け足すように言葉を述べた。

「勝さん。慣れぬ長旅ゆえ船酔い対策をし万全の状態でしたらつしやいませ」

勝はこの渡航中、船酔いに苦勞したと聞く。その事を知っていた玲なりのアドバイスであつた。

「お、おつ」

という勝の返事を聞き届けると玲は立ち上がった。

「それでは、私は夕餉の支度がありますのでこの辺で失礼いたします。勝さん、ごゆっくりしてってくださいね」

と伝えると、もう一度辞儀をして玲は部屋を去つていった。

玲が出て行つた障子を見つめながら勝が言葉を紡いだ。

「義観、おめえさん。あんな娘が縁の者にいるなんて俺は聞いていやいなかつたぜ」

そして視線を義観に向け、更に言葉を継ぐ。

「あの器量だわ、頭は切れるわ、俺はおどれえたつてもんじゃねえぞ。よくよく隠していたな」

「隠しておつたわけじゃないわい。それにの、身内の者がなくなり、わたしが親代わりに面倒をみる事になつたが、わたし自身玲に

は驚かされてばかりじゃ」

と困ったように曖昧に微笑むがその表情の中には嬉しさが見え隠れしている。

「そうかえ。俺が言う事じゃねえが、良くしてやれよ。アレは多分よ、おまえさんに遠慮してんじゃねえか？」

「そうさな。わたしもずっと見守っているのだが玲は中々の頑固者らしいの」

「おう。その辺は、おまえさんに似てら。姿形はまったく似ちゃいねえがな」

と勝は可笑しそうに笑う。

「なんだ？ わたしの顔立ちが醜いとも言いたいのか？」

「いやいや。そこまでは言っちゃいねえがよ……」

と否定するが顔は可笑しさで歪んだままだである。

「……海舟よ。おぬしはほんとに……」

と義観がため息をつく。

しかしこんな勝は、今に始まった事ではなく友人として付き合い合っている義観にしてみれば慣れた事であった。

「さて海舟、夕餉食べていくのだろう？」

「おう、そうだな。頂いていくよ」

と義観の問いに勝が頷きながら答えた。

アメリカへと発つ勝。

万一の不幸を考え、今生の暇乞いとまごいに来たつもりであったが、友人に会い、玲に会った事で、なぜだか今ではそんな挨拶など無用のもののように感じていた。

大丈夫だ。と力強く自分を激する義観。

アメリカ渡航と聞いてもあっけらかんとしている玲。

そんな心配など無用だと。

太陽が沈み、月が支配する闇夜の帳が辺りを包んだ頃。

玲は提灯とヴァイオリンを手に、住処である家を出ると落葉樹や常緑樹の木々が茂る雑木林の中へと入って行く。

落葉樹の葉はほとんど落ちて冬枯れの状態。それと対照的な常緑樹の松や杉は冬でも緑の濃い葉をつけている。

玲が進むに連れて地に落ちた葉や木が、カサカサ、パキツと微かな音をたてる。

吐く息は白く、頬に触れる空気は刺すように冷たい。自然、足を進める速度が早まる。

暫く歩くと木々に囲まれる小さな空間に出た。

玲は足を止め、辺りを見回すと、徐ろに木の枝に提灯を吊るした。そして、ヴァイオリンケースを開きヴァイオリンを手に取る。

優美な曲線の風格ある、そのヴァイオリンは、玲の母の形見である。

そのヴァイオリンを流麗な動作で構えると、玲は静かに目を閉じる。

そして、息をそっと吐き気持ちを鎮めると、弦の上に乗せた弓を滑らせた。

玲の手から生まれる幻想的な音色は、玲の彷徨える魂の姿を表すかのように哀愁帯びている。

美しくも悲しい調べは、本格的に冬ごもりを始めた草や木々を呼び覚ますかのように夜空へと舞い上がってゆく。

勝の家に行ったあの日から玲の胸奥深くで何かが疼いていた。

玲は、始めはその疼きに気付かないふりをしていた。時が経てば無くなると思っていた。

しかしそれは無くなる所かいつしか自分自身さえも戸惑うほどに大きなものへ変化していた。

心のままに奏でられる旋律は、玲の心情を映すように弱々しく悲しげに辺りに響く。

その音色に共鳴するが如く草木がざわめく。

『おまえさん小鹿とお孝に話を聞かせてただろ、みにくいアヒルだかなんとか言ってたな。あれ、おまえさんにも当てはまるんじゃないのか？ おまえさんは自分が劣っていると思ってるけど、そうじゃねえ、自分を知らねえだけだ』

勝に言われた言葉が頭から離れない。

その言葉は、鋭い牙となり玲の心に突き刺さる。

『おまえさんは白鳥になる準備は出来てるのに、なるうとしねえだけなんじゃねえのか？ 人にはそれぞれその人間が持つ個性と才能が秘められてんだろ？ おまえさんの個性と才能はなんだ？ 自分

で分かっているはずだ。違つかえ？』

玲の表情が苦しそうに歪む。

その苦しさが表れたように、切ない音色が静寂の中に響く。

感傷的な音色は澄んだ空気に染み渡り、生い茂った草木を揺らし空気をも震わせる。

玲の頭の中では何度も何度も、勝の言葉が繰り返されていた。

勝が何を指して言っていたのか、玲は十分に理解している。

しかし現状を考えると、とてもではないが医師になどになれない。

（私の知識は現代医学。薬も術用具も電気も無い、この過去の世界で何が出来るといえるのだろうか。私に、出来る事は無い）

この世の医療水準よりはるかに豊かだった平成の世。

玲の生まれ育った現代であれば難なく助けられる人も、この過去の世では、自分がどれだけ奮起しても助けることの出来ない人が大勢いる。

それに、いくら小さい頃から医療に触れていて、自分でも医学を勉強していたといえ、所詮、まだ学生で医者ではなかった。

助けられない人がいる事、知識ばかりで技術の無い自分。

「ごめんなさい」

玲は誰に謝るとなく謝罪する。

過去の医師になる事を使命のように感じていた自分にだろうか？
それとも亡くなった母にだろうか？

（私には、この世での医師は務まらない）

玲の華奢な手から生まれるその音色は、聞くもの全ての魂を揺り動かすほど切なく、甘く繊細な調べは心をひきつける。その旋律は、生い茂った草木を揺らす一陣の風となって、木々の間を抜けどこか行き場を探すかのように夜闇を彷徨い、やがて森を抜けると空気と溶け合った。

(それに、おじ上にこれ以上迷惑は掛けたくない　これでいいのよ)

義観に助けられて以来、全ての面倒をみてもらっている。

路頭に迷うところだった玲に、住む場所を与え、衣服や食べ物を与え、大した事はしていないのにも関わらず給金さえくれる。

それに今日は、この時代に自分がすっかり存在しているのだと証明する人物簿までもも与えてくれた。

そしてそれはささやかな物ではあるが、これまで時間の流れに従うまま存在していただけの浮いた存在だった自分を、今ここで生きているのだと改めて自覚させるものであった。

そんな大切なものまで与えてくれた義観。

(これ以上、迷惑掛けられない)

玲は再び強く胸中で思う。

玲は無我夢中で弓を滑らせる。

やがて曲が終わると二曲目三曲目とそれは永遠に続くかのように、玲一人のリサイタルは続く。

どのくらいヴァイオリンを奏でていただろうか。

玲自身さえも何曲目を弾いているのか分からなくなった頃。

後ろでパキッと音がした。

玲は動かしていた手を止める。

玲の手から紡ぎ出されていた音色が止むと、辺りは静寂に包まれ

た。

「……邪魔したようだな」

「おじ上？」

「ああ、そうだ」

玲は構えていた両腕を降ろし星空を見上げた。

その頬は涙で濡れていた。

「玲、何を考えておる？」

「……いいえ、何も」

「何もない訳がなかるう」

「おぬしが奏でておったその鳴り物はなんとという物なのだ？ 不思議と心が洗われるような澄んだ音色だな」

しかし、おぬしが奏でる音色は酷く悲しいものであった。と述べる。

ここ最近、玲の様子がおかしい事は義観自身、気が付いていた。

玲から何か言ってくるのを義観は待っていたのだ。しかし、待てども待てども玲は口を硬く閉ざしたままで一向に胸のうちを明かさない。

それで、勝に言った『玲は中々の頑固者らしい』であった。

「この楽器は、ヴァイオリンと違って西洋の弦楽器です。日本の楽器でいうと三味線と同様のものです」

音色が悲しいのは、こういう音なのだと思います と玲は呟くように付け足した。

義観からはそれを述べる玲の表情は窺えない。

しかし、音色が悲しい響きだったのは玲の心情をよくよく映しだしていたからであると義観は思っていた。

明白である。今も表情は確認できなくとも、玲の肩が微かに揺れている。

その様は、何かに耐え、悲しみに打ち震えているようであった。

「玲。今日、海舟から話を聞いた。玲は何も言っていなかったが

使いへの道中、人助けをしたようじゃの」

玲は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「おぬしは、何を悩んでおる？ 今日、明心が何かしたい事は見つかつたかと問うた時、おぬしは返答に困つておつたな。困るといふ事は、迷つておるのだろ？」

と告げながら義観は玲の横へと歩を進める。

義観の持つている提灯に照らされた玲の横顔には幾筋もの涙の線ができていた。

「いいえ。いいえ、私は迷つてなど……」

と、玲は横に來た義観の方へと体を向け否定する。

「ではなぜ、涙を流しておる？」

そう云われた玲は、驚いたように呆然と手を頬に当てる。

無意識に涙を流していた玲。玲自身、自分が泣いている事に気付いてはいなかった。

「何をそんなに恐れておる？」

その問いに、玲は、ひゅっと音を立て息を吸い込む。

「玲は、逃げておるのではないか？」

玲は、目を見開き表情を失くす。

「……わ、たし……」

そう、玲は現代の医療とこの世での医療レベルを比べた時、明らかに劣っているこの世の医療に対し恐れを抱いた。

現代医療の知識を持つているからこそ怖いのである。

この世で医療に関わつた時、必ず自分が傷つき、又、歯がゆい思いをするだろう事は否が応でも分かる。

玲は、逃げていたのだ。

傷つく事を避けるため『義観が、』『金子が、』『知識が、』と理由を見つけ自分の守りに入っていた。

「玲、それでいいのか？」

義観が優しく諭す様に聞く。

義観の持つ提灯の火が、ゆらゆらゆらゆら、と玲の心情を映すか

のように揺れ動く。

「おじ上、でも私が居た時代の医療水準とこの世の医療では、あまりにも違いすぎるのです。それが、こんなに怖い事なんて私、思いもしなかつたんです」

玲は、頭を垂れ俯いて述べる。

「うむ、そうだな。しかし、その違いを少しでも埋めることが出来るのは玲ではないのか？ 玲がおった世であつたならばなどは考えず、反対に考えてみたらどうだ？」

玲が先日救つたお子も、玲が居なければ本来死に往く者であつただろう。これから玲が医道に進む事で、本来死すはずの者に生きる道が出来る。とな。と薄い微笑みを携えて告げる。

「……私の知識を、逆に活かす……」

玲は、垂れていた頭を上げると呆然としたように云つた。

「うむ、そうじゃ。恐れなして逃げるでは何も始まらない」

それに……真に医道に進みとうないとは考えておらんのだろ？ と義観が微笑む。

玲の瞳から大きな涙の雫が零れ落ちる。

「……私に医師が務まるのでしょうか？ 私なんかでも……」

「自分を卑下するでない。玲なら大丈夫だ。立派に乗り越えられるはずだ」

諦めたはずだった。

忘れたはずだった。

しかし現実には、勝や義観の言葉に揺さぶられるほど未だ未練があり、更には逃げてても結局は医師になる夢が捨てられない。

諦めたくとも 諦められない。

忘れたくとも 忘れられない。

医師への道。

(私、医者になりたい……逃げたくない)

(でも……………)

医道に進むという事は、義観にまた負担をおわせる事になる。
出来るならば医師になりたい。

だがそれを通すというのは、あまりに我が儘が過ぎる。
そんな事を玲が考えていると、義観が口を開いた。

「一つ言い忘れておった。 わたしに遠慮をと考えているならば、それはいらん事だ。おぬし一人の面倒くらい、なんてことはない」

それにの。と更に言葉は続く。

「わたしは、おぬしを本当の娘のように思っており。だからの、世話を焼くのも苦ではないのだよ」

義観は、これまで玲と一緒に過ごしてきた中で、ある程度玲の思考回路を理解していた。

今回の事も、多少なり自分への遠慮が存在しているがため玲が踏み切れないでいるのであると義観はすでに見抜いていた。

「……………おじ上……………」

玲の瞳からとめどなく涙が溢れる。

「おぬしは本当に泣き虫だの」と義観が笑う。

「おじ上、本当にいいのですか？ 私、おじ上に甘えっぱなし……………」

「いいも何も、わたしは初めから望む道がみつければ其の方へと進めば良いと言っていたではないか。遅くなっただがそのために人別簿も作った」

と述べ、懐から懐紙を取り出す。

そして、それを玲に手渡しながら、

「玲、望む道に進みなさい」

と目尻に柔らかく皺を作り微笑む。

「お……おじ上、ありがとうございますっ」

と玲は懐紙で顔を覆いながら咽び泣く。

義観は、困ったな、と云う風に微笑みながら玲の頭をポンポンと優しく叩く。

「玲。その鳴り物……ばいおりんとかいったな、それを奏でてはくれんか？」

もう一度、聴かせてくれ。と義観が述べる。

すると玲は、涙を流しながらも、

「ええ。おじ上の頼みとあらば、なんなりとっ」

とにっこり微笑んだ。

再び始まった、玲のリサイタル。

月や星が見守る中、此度奏でられた音色は先程とは違い、希望に

満ちた明るいワルツ。

風に揺れ木々達が、さわさわと歌う。

落葉が、玲の奏でる音色に誘われるように舞い踊る。

透明な、それでいて力強い音色が玲の手から紡ぎだされる。

義観は、その音色を聴き頬を緩めた。

『もう、玲は大丈夫であろう』と。

邂逅 壱

寒さが一層厳しくなつた晩冬の師走も押し迫る頃。

玲は、これから医学を学ぶため世話になる事になつた先生に挨拶をするため、義観に教えてもらった先生が開いているという療養所に向かつていた。

そこは、寛永寺から歩いて三、四〇分のところにあつた。

「ここかな？」

辺りを見回しながら地図と照らし合わせる。

「たぶんここよね？」

療養所と聞いていた割には、ごく普通の門構えである。

(本当に療養所？ 看板も何もないけど……)

見た目は、何処にでもある日本家屋。目立つた看板もなく、玲は本当にここが現代で言う病院なのかと疑問を持つ。

しばらくそんな事を考えながら眺めていると、

「ちよいとその娘さん、前を開けておくれっ」

と背後から声を掛けられる。

驚いた玲は振り返る。すると、そこには焦つた様子の男が背中に人をおぶさり立っていた。

背に抱えられた人物は苦悶の表情を浮かべ呻き声を出している。

「ごう、ごめんなさい」

玲は慌てて道を譲る。

男は急ぎ足で門を潜り抜けていった。

しばらく呆然とその背を見送っていると後ろでドサツ、と何かが倒れた音がした。

再び驚く玲は、音のした方へと視線を向けた。すると今度は、転

んだのだろうか？ 五歳くらいの小さな女の子が地面に突っ伏して
いた。

玲は慌てて子供の傍へと駆け寄る。

「ころんだの？ 大丈夫？」

「うああ おっとうお……」

子供は泣きながら父親を呼ぶ。

玲は子供を抱き起こすと子供の姿を見回しながら怪我の有無を確
認する。

「大丈夫？ どこか痛い所はない？」

すると子供は泣きながらも手を玲に見せるように差し出してきた。

「あゝ、手を擦り剥いたのね これ位なら大丈夫よ。すぐ治っ
ちやうわ」

ここにお医者様がいるのよ。ちょうどいいわ、消毒してもらおう
ね。 と微笑みながら玲が述べると、子供は小さく頷いた。そし
て、

「おっとうが……」

と言うと、子供はまたベソをかき始めた。

「おっとう？ お父上が、どうかしたの？」

「おっとうが、おっとうが……」と子供は、嗚咽しながら述べ療
養所を指差す。

（療養所？ ……もしかして、さっきの？）

「お父上って、さっき男の人におぶされていた人かな？」

玲がそう問うと子供は泣きじゃくりながらも首を縦に振る。

「そう……心配ね。私もここのお医者様に用事があるの。一緒に
様子を見に行きましょう？」

と述べると、子供は涙を流しつつも顔を上げ頷いた。

玲は、大丈夫だよ とでも励ますようにニッコリ微笑んで子供
の小さな手を取り門をくぐる。

木製の日本独特の玄関の戸は開けっ放しになっており屋敷の中が丸見え状態である。

玲は、人を探しながら敷居を跨ぐ。

そこは、やはり療養所だからだろうか？ 屋敷の見た目は至って普通のその辺にありふれる日本家屋であったが、家中の作りは普通ではなかった。

玄関にある式台を上がると、廊下を挟んだ奥に八畳くらいの板の間があり、そこには莫蔭もくいんが敷いてあり座布団や火鉢が置いてあった。さながらその様子は、現代でいう病院の待合室だ。

玲は、軽く感動を覚えながら、

「どなたかおりませんか？」

と、声を掛けた。しかし、何の反応もない。

(きつと、この子の父親の治療に忙しいのね……)

そう思い至った玲は、とりあえず上がらせてもらおう事にする。

「きつと今、お父上の治療をしてるんだわ。ここで待っていようね」

と、子供に声を掛けて草履をぬぐ。

「そうだ。名前まだ聞いてなかった。私はね、玲と言っの。あなたのお名前を聞いてもいい？」

子供は、いまだに涙を浮かべているが先程よりは落ち着いた様子で、こっくりと頷いた。そして、

「しず……」

と、小さな声で言った。

「しずちゃん？ おしずちゃんね。ありがとう、教えてくれて」

さあ、寒いからおしずちゃんも上がりましょ。 と玲は、おし

ずの草履をぬがすと手を引いて座布団に座らせた。

(うっん。勝手に上がっちゃったけど大丈夫だよな?)

今更ながら若干の不安に襲われる。

(でも、ここ待合室っぽいし良いよね)

玲は、どこが治療室なのかと探すように、きよろきよろと辺りを

見回す。

「ここ待合室のような間の奥に木製の戸があるが、この戸の奥で、もし治療をしているとしたら余りにも静か過ぎる。」

「（この戸の奥は治療室じゃないわね。物置かただの部屋かな……となると治療室は廊下の奥かな？）」

と、玲は玄関前から続く廊下を見る。

「おしずちゃんの、お父さんの様子が気になる……」

「ねえ、おしずちゃん？ おしずちゃんの父上は、どうして運ばれてきたの？」

「……雨漏りするって、しず達が住んでる長屋の屋根を直してて落っこちたの……」

「屋根から落ちたの!？」

「打ち所が悪かったら大変じゃない。大丈夫かな？」

様子を見

に行ってみようかしら？ でも……」

おしずから話を聞いた玲は心配で様子が気になるが、自分が行った所で何が出来るだろうかと思ひ悩む。

そんな事を考えていると、廊下の奥が騒がしくなりバタバタと人が走る音が聞こえてきた。

「おじちゃんっ!」

「おう! おしず! 来てたのかっ」

治療室から慌てた様子で出て来た、おしずの父親を担いでいた男がしずを見て驚いたように述べた。

「お、おつとうは??」

「おしず悪いな、いま説明してる暇がねえんだ。若先生じゃ手におえねえらしいんだ。桜所先生を呼んでこなくちゃなんねえ」

また後でなつ。と云うと男は急いで玄関を出て行った。

「おつとうが……」

おしずの瞳に、みるみる涙が溢れる。

「おしずちゃん……大丈夫よ、きつと」

「（やっぱり様子を見に行こう。もしかしたら私にも何か出来る

事があるかもしれないし……）」

「私のおじいちゃんとおにいちゃんは医者様なの。私も少しは医道を齧^{かじ}ってるのよ。様子を見てきてあげるわ」

大丈夫だから、待っていてね。と云うと玲は廊下の先にある治療室であろう部屋を目指して歩き出した。

部屋の近くまで来ると、苦しそうにしている呻き声が漏れ聞こえてくる。

玲は躊躇なく目の前の引き戸を開けた。

「……！！　なんだ、おまえは！？」

玲が戸を開けると、治療にあたっていた若い青年が驚いて声を上げた。

しかし玲は構わずに患者のおしずの父親のもとへと歩み寄る。

今も辛そうに呻き声を上げているおしずの父親は、木製の現代で云うならベッドのような形状の台の上で横になっていた。

玲は、おしずの父親の状態を目で確かめる。

打撲や細かい傷が体中に無数にあり、足首が少し赤く腫れ上がっている。更には、右肘の肘頭が後方に突出し筋肉の腱が紐状に見えるた。

（　足首は捻挫か骨折の疑いがあるわね。肘は、脱臼ね。思っていたより軽症みたい　でも肘脱臼は激痛なんだよね。はやく肘を整復して上げなきゃ……）」

想像していた状態より軽いものであったため自分でも処置が可能であろうと玲は判断する。

「肘が痛いですね　でも大丈夫ですよ、すぐ治りますからね」

玲はおしずの父に安心させるように笑顔で述べた。すると、

「おいっ！　何言ってるんだ！　あんたは誰だ？　行き成り入って来て、何処ぞの誰だか判らん奴に勝手な事されちゃ困るっ！」

玲の前方に立っていた青年が顔を歪めて声を荒げた。

（この人が、さっきの人が言ってた若先生ね……）」

「これから此処でお世話になる事になった柳崎です。詳しい事は

また後でゆつくりご説明しますから」

玲は、手短に述べるとおしずの父の肘の周囲を触診しはじめた。

「あつ、おい！ 勝手にっ……………」

「肘が腫れてきたわ。早いところ整復しちやいましょう」

「おまえ、何を言っ……………」

「肘を元に戻す前に検査をさせて頂きますね。もう少しだけ辛抱してください」

玲は、若先生と呼ばれていた青年の言を無視しておしずの父にそう述べると脈拍の確認をした。

更に、手背や掌の皮膚知覚、手指の運動を調べる。

（手の感覚もあるようだし、手指も動く。動脈や神経の損傷の有無が心配だったけど大丈夫みたいね）

「それでは、今から肘を治しますからね」

自身が護身術を習っていたため、身近な怪我として以前、脱臼や捻挫・骨折などの整形外科分野の勉強をした事がある。

しかし、知識はあっても医者ではないため、当然、治療の経験は皆無。

（落ち着いて 大丈夫、出来るわ。それに、時間が経つと整復が困難になる。早く肘をもどさなきゃ）

自分に肘の整復が出来るだろうか？ と一瞬不安がよぎったが、早急に治療しなければ患部が腫れ始めて整復が困難になると自分を奮い立たせる。

（よし！ やるぞっ！）

玲は自身に気合いを入れると、

「若先生、手伝ってくださいっ！」と青年に声を掛け、更に続けて、

「この辺りを動かないように両手で押さえていてください」と、おしずの父の右腕上腕部を両手で固定し こんな感じで。と教えた。

「なっ、なんで俺が」

「あなたも医者の方でいいよ。患者を助けたいとは思わないの？ 助けたいなら何も言わず手伝って！」

そう玲が言うと、青年は不満気にはあるが玲の指示通りにおしずの父の腕を両手で固定した。

「これでいいの？」

「ええ。それで大丈夫よ」

玲は、気を落ち着かせるように、ふうと息を一つ吐くと、おしずの父の方へと体勢を変える。

「おじさん、力を抜いて体を楽にして下さいね」

「……おつ」

痛みに耐えているからであろう、目を充血させて辛そうに述べた。玲は、おしずの父の右手首と肘関節をそれぞれ手で掴み、

「すぐ終わりますから、少しの辛抱です。おしずちゃんが待ってます。ちやちやつと治しちゃいましょうね」

「おしず？」

「ええ。心配して追いかけて来たみたいですよ。早く安心させてあげましょう」

玲は、にっこり微笑んで述べた。

「では始めますよ」

と云うと一拍後、掴んだ腕をゆっくり下方へと引いた。次いで、牽引を緩めずに前腕を回内・回外する。

「う、うああああ！！」

あまりの痛みにおしずの父が叫ぶ。

玲は、それでも術を進める。

するとゴクツ　と肘の骨が関節にはまる鈍い音がした。

（……やった！！　元にもどった！）

「肘が正常に戻りましたよ」

玲は、ホッと胸を撫で下ろしながら微笑んで伝えた。しかし

「……………」

患者張本人のおしずの父は一瞬何が起きたのか分からないといった様子で呆然としている。

いままでの苦痛が嘘のように一瞬にして激痛が消えたのだから当然といえば当然の反応であろう。

「おじさん？ …… 大丈夫ですか？」

何も返答がないため玲は不安になり問いかける。

「あ？ お、おう。 …… でえ丈夫だ」

いまだ呆然とした状態には変わらないが今度は返事が返ってきた。玲は、再度胸を撫で下ろし、「では……」と整復後の確認に移った。

「腕の運動の確認をしますね」

と述べると、肘関節の軽い屈伸や前腕を内回り外回りに回転し運動機能を調べる。

「大丈夫みたいですね。機能回復してます」

更に言葉を続ける。

「今回、屋根から落ちたということで、その落ちた際に地面に腕を着いたことで衝撃により肘関節から前腕が外れてしまったようです。この症状を肘関節脱臼というのですが、脱臼などをしてしまつた場合には再発や変形などがないように患部を固定しなければなりません」

ですから、これから腕を固定しますね。 と丁寧の説明をする。

そして、固定のための道具を用意してもらおうと、玲は顔を青年の方へと向けた。すると、思わず目を見開く玲。

（うわっ！ めちゃくちゃ機嫌悪そうな顔してる……）

青年は、ムスツとした表情でそこに立っていた。

「……え、え〜と……若先生？ 腕を支える副木もしくは厚紙はありますか？ あつあと、包帯も……」

玲は今更になって、ここ療養所で若先生と呼ばれている人物にとんでもなく失礼な態度を取っていると気付き恐る恐る問いかける。

「あ？ …… 待ってる、いま持ってきてやる」

それでも青年は、機嫌は悪そうだが玲の指示に素直に従う。

(あれは相当怒ってるわよね……あとで謝らなくちゃ……)

玲は青年の後姿を見ながら胸中で呟く。

しばらくして青年は副木になりそうな板と包帯より少ししっかり目の布の包帯らしきものを手に戻ってきた。

「包帯は中々手に入らねえからウチじゃ使ってねえんだ。晒しを裂いたものだがこれでも十分だろ？」

この時代、まだ包帯は数少ない貴重品であったため値も張り手に入れづらいものであった。

「ええ。大丈夫。ありがとう」

玲は受け取ると手早く副木と晒しで腕を固定していく。

最後に裂いていない晒しで三角巾を作り、腕を包むようにして首の後ろで結び腕を吊るした。

「はい、これで腕の治療は終わり。二十日間はこのままの状態です。ですが、肩や手指の運動はしてくださいね」

でも、あまり腕に負担を掛ける様な事はなさないで下さい。無理をするとまた肘の関節が外れちゃいますからね。と念を押す。

「わかりました」

「さあ、次の治療をしましょう」

と、玲がおしずの父と青年に笑みを向け言った時、

「おやつ？ あんたは誰だね？」

と、義観と同じ年齢位の男が治療室に入ってきた。

「先生！」

青年が驚いて声を上げる。

(えっ？ 先生？ じゃ、此処の……)

「おう、佐吉にわしを呼んでくるように言ったのは凌雲りょううんだな？

急いで来たんだが、どうやら……わしが来んでも大丈夫だったようだな」

青年が先生と呼んだ男は、玲が治療し終わったおしずの父の腕の様子をまじまじと見ながらそう述べた。

「この治療は……あんたがやったのかね？」

男は、顔を上げると玲に視線を向けて問うてきた。

「はっはい。……申し訳ありません、勝手な事をして……」

玲は急に畏縮して、居心地が悪そうに辞儀をする。

「いや、それは構わんよ。しかし良く手当てが出来ている、大したものだ。あんたは医者なのかい？」

「いえ……まだ今は医者じゃありません」

「まだ医者じゃない？」

男は、不思議そうな顔をして述べる。

「ええ　これから此処でお世話になりながら医者を目指したい
と思っっています……」

「……此処で？」

玲の言がよく飲み込めていない様子で呟く。

「はい。　申し遅れましたが、私は柳崎　玲と申します。寛永
寺の義観僧都からお聞き及びかと存じますが、これからこちらでお
世話になります」

そう述べるると玲は深く辞儀をした。

それを、先生と呼ばれた男は心底驚いたといった様子で眺めてい
る。

「　　んん？　確かに義観僧都から言われているが……あんたか
いっ……」

「はい。これから宜しくお願い致します！」

玲は、につこり微笑みながら告げると再度辞儀をした。

「……ああ」

半ば呆然としながらも、先生と呼ばれた男が返事をする。そして、
「おなごとはな……こりゃ驚いた」

と独り言のように呟くと、言葉は更に続いた。

「わしは、石川桜所だ。此処はわし個人の診療所なんだが、その
切り盛りをしている。　まずは手当てが先だな。後でゆっくり話
をしよう」

そう言うと、桜所は青年に指示をして手早くおしずの父の手当てをしていった。

いしかわあつしよ
石川桜所

幕末期の蘭方医として伊藤玄朴らと並び著名な人物である。

また安政五年には伊藤玄朴・大槻俊斎らと図り、お玉ヶ池種痘所を設立した一人である。

のちに桜所は、鳥羽伏見の戦いの後、大坂から江戸に戻った徳川慶喜のお供で上野寛永寺に従い入る事になる。

しかし、それはまだまだ先のお話。

「どうもお世話になりやした」

おしずの父が頭を下げお礼を述べる。

「おう、あんま無理すんなよ」

桜所が笑いながら言う。

「ねえちゃんも、ありがとな」

おしずの父が玲に向かって礼を述べる。

「いいえ。お大事にして下さいね。おしずちゃん、よかったね」

玲は微笑んで、おしずの父とおしずを見て告げる。

「うん。玲おねえちゃん、ありがとう」

おしず達が帰っていくのを、玲達が見送る。

やがて、おしず達の姿が門の向こうに消えると桜所が口を開いた。

「さて、一服しながら話でもするか。凌雲、茶を入れてくれんか」

「はい」

青年は返事をする。勝手のあるだろう方向へと向かって行った。

桜所は待合室の座布団に座ると、玲にも座るように視線で促す。

「柳崎とか言ったな、あんたはおなごだろ。本当に此処で学ぶ気

があるのか？」

「お言葉ですが、医道を志すに女子おなこも男子も関係ありませんよ。その志す気持ち次第。そうではないですか？」

「おうおう、こりゃとんだじゃじゃ馬な」

と桜所が可笑しそうに笑う。そして、

「そうだな、志す気持ちに女子も男子も無し。いいだろう、此処で存分に学べば良い」

しかし と言葉は続く。

「その格好では、色々不都合が出てくるな……そうだ、此処にいる間は女形は止めて動きやすい姿をしなさい」

「それはつまり……袴などの男装や作務衣を着用するという事ですか？」

「うむ、そういう事になるな」

「わかりました。以後、そのようにいたします」

「うむ」

思っていたより簡単に話が進み、双方の意見がまとまった頃、青年が茶を載せた盆を手に戻ってきた。

「そうだ。おまえたち自己紹介はしたのかい？」

玲は、先ほどのこともあり気まずそうに目を伏せる。

青年は淡々と茶を床に置くと、不機嫌そうに言葉を述べた。

「いきなりの事だったので、まだしつかりとした挨拶などはしておりません」

二人の間に流れる微妙な空気に桜所は、自分が着く以前どんなやり取りがあつたかを悟る。

「凌雲、おまえもまだまだ修行中の身。医学の道は長いんだぞ

しかしそんなおまえも兄弟子になるのだ。しつかり面倒みてやれよ」

と、青年に向けて言うつと続けて、

「こいつは、わしの弟子の高松凌雲たかまつりょううんだ。柳崎、おまえさんの兄弟子だ。互いに良くやってくれ」

「はい」

と返事をする、玲は体を凌雲の方へと向けた。

「高松さん、先程は大変失礼を致しました。どうかお許しを。そして、改めまして私は柳崎 玲と申します。これからどうぞ宜しくお願いいたします」

そう凌雲に告げると玲は、両手を床に付き深く辞儀をした。

その様子を眺めていた凌雲は一つため息をつく、

「俺も大人げなかった。こっちこそ宜しくな」

と述べながら、照れているのだろうか不機嫌そうな表情のまま視線を横に流した。

「よし。これで自己紹介は終了だ。茶でも呑んで一服しようではないか」

これから玲が医学に励むため通う事になった療養所。

『石川療養所』

此処は、桜所の自宅兼病院という形の療養所で、そこに凌雲は門下生として住み込みで働きながら勉学をしているという。

今のところ、門下は凌雲のみ。

それは、桜所自身が非常に多忙な人物なため、人を育てるという事に時間が割けないためであった。

桜所は、此処の診療所以外にもお玉ヶ池種痘所でも動いている。

それだけでなく頼まれれば患者の自宅まで診察にも行く。

そのため多忙な桜所は、新たな門下生を入れずにこれまでやってきていた。

しかし此度は次代輪王寺門主となるべく宮の側近のような人物の義観僧都の頼みである。

また一段と忙しくなるなど考え、本音では面倒だなと考えていた桜所であったが、実際玲に面会し、性別には驚かされたが、それでも良い意味で期待を裏切ってくれた玲に、桜所は考えを改め直した。忙しくはなるが、これからどう玲が成長していくのだろうかと思

守って行きたくなつたのだ。

こうして医道に進むため石川診療所の門下生と無事相成つた玲。
これからの彼女の医道、そして人生の道筋は如何いかにが。

邂逅 壺（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

今年に入り更新頻度が更に遅くなってしまい申し訳ないです。

私事で大変申し辛いのですが、以前と環境が変わり更に小説の執筆時間が取れない状態が続いております。

当分の間、更新が以前にも増して遅くなるかと思えます。

暇をみつけて筆は取っておりますが、遅筆になることをお許しください。

気分転換がてらに描いていた絵などは、たまっているので表紙絵などは時間があれば更新します。

……と言いますが私、皆さんの意見も聞かず勝手に表紙絵を付けていますが、玲のイメージ壊れていませんか？

いまさら気付いて、何言ってるんだ！ って感じですけどイメージを壊したくない等、苦情がある場合は表紙絵をやめますので言うてくださいね。

それでは、また。胡竹

邂逅 式

新しい年も迎え、桜所を師事し診療所で働く事も慣れてきた頃。今日も今日とて、診療所スタイルの袴姿で玲は忙しく立ち回っていた。

「おい柳崎！ 行くぞ、もたもたしてんな」

玲が、往診バツクに玲独自に作った患者のカルテや医療道具などを詰めていると何処からか不機嫌そうな自分と呼ぶ声が聞こえてくる。

「はいはい！ 今行きますよ、高松さん」

今日はまた一段と機嫌が悪そうだなあ と、玲は胸中でぼやきながらも兄弟子である凌雲に返事を返した。

これから玲は、凌雲と共に患者の往診に行くのだ。

最近は、桜所が忙しくて診療所から出られない時や不在の時などに、こうして凌雲と二人で往診に出掛けるようになった。

玲は、急いで荷物を詰め込むとバツクを手に持ち、パタパタと小走りで診療所の出入り口に向かって行き、凌雲の姿を探してきよるときよると辺りを見回す。すると、

「玲ちゃん、若先生と往診かい？」

若先生なら、先に行つちまつたぞ。 と診療所に来ていた患者

の弥吉さんが笑いながら声を掛けてくる。

若先生とは、診療所での凌雲の呼称である。

弥吉さんの言を聞いた玲は、驚きながら開けっ放しになっている出入り口を見た。

すると、門に向かい庭先を歩く凌雲の後ろ姿が目に入ってきた。

「あつ！ 高松さん！」

玲は、置いていかれる。と焦りながら急いで草履を履き駆け出し

た。

が、その瞬間、ちょうど診療所に入ってきた人物と正面からぶつかった。

「！！！」

「うわあっ！」

玲は、ぶつかった反動で、せつかく立ち上がった板敷に尻餅をつく様に再度、体を戻される。

(いたた……。今日は厄日かあ?)

板敷に打ったお尻を撫でながら、今日はずいてない。と胸中でぼやいていると、

「すまん。大丈夫か？」

と、ぶつかった人物が玲に声を掛けてきた。

玲は、はっとして顔を上げる。

「あつ、こちらこそすいません。私、前を見ていなかったから……」

そちらこそお怪我はありませんでしたか？ と玲は申し訳な

さそうに顔を曇らせて問うた。

とその時、外から、

「柳崎！ 何やってんだ、置いてくぞっ」と凌雲の物凄く不機嫌そうな声が聞こえてくる。

玲が視線を庭先に向けると、門に背を預けてこれまた不機嫌そうな表情で立っている凌雲が見えた。

しかも、地面に置いていた木製の鞆を手に取り、今まさに玲を置いて往診に行こうとしている。

「えっ？」

ちよちよっと！ 本気で置いて行く気い！？ と玲が焦りながら凌雲を眺めていると、

「彼が呼んでいるのは君の事だろ？ 僕は大丈夫だから行きなよ」
おいていかれるよ？ と玲の目の前の人物は述べてきた。

「えっ？ 本当に大丈夫ですか？ ……それじゃ、お言葉に甘え

て失礼致します」

本当にすいません。と玲は恐縮そうに、でも早口に述べ、最後にお辞儀をして凌雲を追いかけてポニータールに結った長い髪をなびかせ勢い良く駆け出した。

この人物との出会いが、後に玲の人生を大きく揺るがすものになるのだが、それはまだ先の話である。

いまだ玲が気付く筈も無く、ただ、今は医学の道へと一歩また一歩と着々と歩んでいた。

療養所から寺に戻り、玲が自分の住む家屋の掃除や夕餉の下準備をしていると、明心が訪ねてきて義観が玲を呼んでいると言う。

玲は、急いで義観の住まう院へと向かった。

「遅くなりました。おじ上、玲です」

「お入りなさい」

「はい」と返事をして室内へと入ると見知らぬ人物が義観という。

玲は、はて？ どちら様かしら？ といった風に鎮座しながら義観に視線を送る。

すると、その視線に気付いた義観が、

「こちらは薬種問屋金木屋の主人、峯助殿だ。玲に用があつて寺にいらつしやつたそうだ」

「??? はあ……」

(薬種問屋の旦那さん？ どうしてそんな人が?)

その人物は、髪を町人髷に結い利休茶の着物に羽二重縮緬の高級絹織物の羽織を纏まとつており、いかにもといった裕福そうな人物であ

った。

「柳崎 玲です 此度は、どういった御用件で？」
と玲は自己紹介をしつつ用件を問う。

しかし、その薬種問屋の主人は玲の容姿を眺めたまま目を見開いてしまっていて何の返答も無い。

「あの……？ どうかなされましたか？」

「あつ……いえいえ……」

と焦った様子で峯助は懐紙を取り出し額の汗を拭った。

例の如く、玲のその容姿に驚いていたようだ。

暫らくして一つ咳払いをすると、峯助は早口に言葉を発し始めた。

「大変ご挨拶が遅れてしまったのですが、此方は大寺院という事で訪ねるにも気構えちまいましたこのような無作法なお伺いになってしまいました。なんせ刻限が経ちましたから覚えてくださっているかどうかも危ういですが、手前の倅せがれが川で溺れて危篤だったところを、お玲様が助けてくださったようです。 僭越ながらお礼を申し上げたく参った次第でございます」

その節は、誠にお世話になりました。 と深く辞儀をする。

(川で溺れて……？ 私が助けた？)

「あつ！ あの坊や！？」

玲は、思い出し驚いた表情を浮かべる。

「玲、覚えておるようだな」

義観が述べる。

玲は義観の方に顔を向け頷きながら、

「はい」と述べた。そして、今度は坊やの父という薬種問屋の主人の方へ顔を向けて、

「とんでもないです 私は大した事をしていませんよ。わざわざお礼のために此方まで来て頂いて、私こそ恐縮です」

と、玲も慌てて薬種問屋の主人に向け深く辞儀をした。

「大事な一人息子を助けて頂いたのです。遅くはなりやしたが、お礼を参じにお伺いするのは当たり前のごさいます」

感謝してもし足りません。お礼といつては何ですが、手前らの気持ちです。と椿の花が描かれた漆塗りの箱を、玲の目前へと差し出してくる。

「些少で御座いますが、お納めくださいませ」

問屋の主人峯助は畳みに頭を擦り付ける様に深く平伏する。

「や、やめてください。頭をお上げになつてください」

(それに、些少つて事は、お金が入ってるのよね?)

「お受け取りできません。お気持ちだけ頂いておきます」
慌てて断りの返事をする玲。

「いいえ。こいつぁお受け取り頂きやすよ」

「手前どもは本当に感謝してやがるんです。こうでもしねえとお天道様に顔向けできねえ」

気が済まねえんです。と峯助は箱を差し出したまま頭を上げようとしなない。

玲はあたふたしながら、助けを求めるように義観を見る。

けれど、義観は自分で決めなさい。と言っているかのように無言で玲を見つめ返すだけ。

(困ったなあ……でも、正直なところこの金子が頂けると当面はおじ上に迷惑掛けずに済むし、医療道具も買える……)

しばらく眉間にしわを寄せ、何やら考えていた様子の玲は、徐おもむきに小さく頷き口を開いた。

「はい。では有り難く頂戴いたします。ですから、頭をお上げに……」

その返事を聞いた峯助は、深く下げていた頭を上げにつこりと微笑む。

「よかった。この位の金子じゃ本当はたりやしねえ位です。なんせ家のたつた一人の倅の命を救って下すつたんだ」

そして峯助は続けて独り言のように いや、しかし良かった。このまま箱さげて家に帰ったら女房に何言われっか…… と呟きながら心なしか小さく身震いをした。

「お玲殿、僧都様にお聞きしたんですが今、医者を目指していらっしやるとかで……」

峯助は、思い立ったように顔を上げ玲に問うてくる。

「……ええ、まだまだですけどね」

玲は、照れくさそうに答える。

「それは好都合。先程、僧都様にご紹介頂いた様に家は薬種問屋を営んでいるんですが、薬は多様にございます。何か御用の際は是非に家に来てくださいませ」

「そうですね。それでは、今度伺わせていただきます」

これには玲も快く返答をした。

玲の鼻肩の薬種問屋が出来たのだ。医道を目指す立場としては嬉しい事である。

「へえ。お待ちしてます。それでは、あたしはこの辺で失礼いたしやす」

と、玲と義観に深々と辞儀をし、最後にもう一度お礼を述べると峯助は、問屋を営む自宅へと帰っていった。

「しかし、助けたお子の家が薬種問屋を営んでいるとは、これまた奇遇だな。しかも大店おおだなだぞ金木家は……」

「大店……そうなのですか？」

「うむ。玲が医道を志した途端にこの巡り合わせだ。なにかに導かれておるようだな……」

義観はしみじみした様子で述べた。

「はあ。導きですか？」

確かに医道を進み始めた玲にとっては嬉しい偶然である。

しかしこの時代で生きる事に精一杯な玲は、導きなどと言われてもいまいち理解できず、気の抜けた返事をする。

「まあ、良い。良い行いをすれば見返りも返ってくるってもんじゃ。有り難く金木家殿にお世話になるといい。しかし感謝を忘れるでないぞ」

「はい」

その後、自分の住まう離れに戻った玲は、峯助から貰った高級そうな漆塗りの箱を開けて吃驚した。

なんと中には、小判が百枚。この時代で言う百両で現代の金額に換算すると約四百万円相当の金子が収められていた。

慄いた玲は後日、金子を返しに金木家に赴くがやはりと言っべきか、金子は受け取ってはもらえず、そればかりか医者なのだから必要であろうと多種多様の漢方薬をお土産に持たされ追い返されることになる。

邂逅 式（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございます。

更新が遅くなりまして、この作品を読んで下さっている皆様には大変ご迷惑をお掛けしております。

本当に申し訳ありません。

時間がとれず短く纏まりのないお話になってしまいましたが、楽しんでいただけたら幸いです。

なお、読んで下さっている皆様には本当に申し訳ありませんが未だ執筆時間が作れない状態が続いております。

遅筆になることをお許しください。

また、更新が難しい状態が続いておりますので表紙絵を一旦やめる事にしました。

その代わりと言ってはなんですが、みてみんな登録しましたのでご興味のある方はみてみんなの方にてイラストをご覧くださいませ。

多分、小説タイトルで検索しますと出てくると思います。

こちらもお目汚しになる確率が高いので、ご注意くださいませ；

最後になりましたが、ご感想を下さった皆様、お返事が大変遅くなり申し訳ありませんでした。

とても嬉しく励みになっております。ありがとうございました。

それでは。胡竹

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4213e/>

我思う、故に我在り

2010年10月11日20時31分発行